

山
ご
ら

第34号 平成15年11月

関東氷上郷友会





ハートへ、ダイレクト。

企業のメッセージを、お客様一人ひとりに向けて直接的に結びつけること。そしてお客様に心からご満足いただける商品やサービス、情報を提供し続け、企業との間に揺るぎない信頼関係を築くこと。これが、DMSの提唱してきた「ダイレクト・コミュニケーション」です。業界のリーディング・カンパニーとして長年培ってきたノウハウはデータベース活用やデジタル・テクノロジー、ロジスティクスと多岐にわたり、多くの企業からご評価いただいています。また、大切なお客様のプロフィールを扱う立場から個人情報保護にも積極的に取り組み、公的な認証である「プライバシーマーク」を取得しました。これからも、「コミュニケーション・クリエイター」として、企業戦略と生活者のプライバシーを尊重した、お客様の心をつかむプロモーションをご提案してまいります。



株式会社 ディーエムエス

本社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1-11 DMSビル / 大阪支社 〒535-0031 大阪市旭区高殿7-15-8
DMS第二ビル / 板橋業務センター / 江東業務センター / 朝霞業務センター / DMSロジスティクスセンター

■お問い合わせ：営業本部 営業推進部 TEL.03-3293-2970 FAX.03-3293-8497
■インターネットホームページ <http://www.dmsjp.co.jp>

加盟団体▶(社)日本ダイレクトメール協会 / (社)日本テレマーケティング協会 / (社)日本通信販売協会 / (社)日本広告審査機構

当社はマーケティングサービス業界において最初にPマークを取得しました。また、日本工業規格「個人情報保護に関するコンプライアンス・プログラムの要求事項 JIS Q 15001」にも適合していることが承認されています。



山ざくら

第34号

山ざる 第34号 目次

〈表紙〉常岡幹彦画「晨雪 高源寺」(10号/青垣町松倉)

〈扉・目次写真〉

- ①青垣町西芦田にて「ずいき」／②③柏原町北山より石生連山を望む
④福知山線石生踏切付近〈徳田八郎衛・撮影〉

国敗れて山河あり……渡邊隆男 5

平成14年度「ふるさとの会」……6

祝寿の方々ご紹介……10／懇親会スナップ……12

会計報告書……14／寄附者芳名……15

〈ふるさと随想〉

『鶴牧藩日記』―丹波領分和田代官所記録―……梅田重二 16

K君へ、あの頃そして今……井本義一 19

父と丹波……西畑健一 23

ストリップがやって来たノ……徳田八郎衛 24

丹波に関わる三題……谷口 捷 26

〈丹波を撮る〉……撮影・徳田八郎衛 32

△近況・エッセイ▽

朝のウォーキング……生田清弘 38

金婚式を迎える年に……井田悦子 44

姉妹旅行……木呂子恵美子 45

草の根文化交流を目指して……上 高子 47

今年の花見……木村つた江 50

△私の職場▽ 介護老人保健施設「シルバーケア敬愛」……本城英明 54

△旅のエッセイ▽

キューバを訪問して……酒井重男 56

サワラ砂漠で会った男……澤田哲生 59

△ふるさとトピックス―丹波新聞から―▽ …… 63

△丹波通信▽ 蓄音機ミュージアム……小田晋作 64

△会員だより▽ …… 66

△BOOKS▽ …… 76

△インフォメーション▽ 展覧会……80 / 同窓会……80 / 同好会……82

協賛広告……83 / 編集後記……96

柏原おどり

野口雨情・作詞

〽名さへ目出度い入船山に

町のまもりの八幡宮

〽誰と別れか入船山の

夜明鳥が啼いてくる

〽青葉かくれの三重の塔を

啼いて空ゆく時鳥

〽庭の老松昔の名残り

今もしのぼす御殿跡

〽見たか柏原太神川に

かけて渡すは木の根橋

〽昔思えば鐘ヶ坂峠

幾度涙でこしたやら

〽咲いて見事な桜の陰に

春の花見は鐘ヶ坂

〽天の橋やら雪さえかけて

鬼の架橋見えかくれ

〽町の真中櫓の上で

つつじ太鼓がひるねする

〽鬼門封じて名高い寺は

丹波柏原円成寺

〽丹波柏原忘れてなろか

山の中だが城下町

〽いとしなつかし讓葉山の

下は柏原忘らりよか

国敗れて山河あり

会長 渡邊隆男



みなさまお変わりありませんか。山ざる誌が出来るたびにあ、もう一年が過ぎたのかと思います。そして私の古里もまたひといき忘却の彼方の中に沈み、あの山河が濃い霧の中にかき消されていく思いです。

祖父がよく日清日露の戦役を語り聞かせてくれたように、私たちもまた太平洋戦争の語り部でした。ところが近年はブッシュ保安官が正義の御旗をかざす西部劇、イラク・テロのモグラ叩き、果ては北朝鮮の核開発とか日本自衛隊の出稼ぎ論と、性懲りもなく国同士の野蛮な争いの火種が絶えません。

正義だ大義だ聖戦だなんて自己中心的で勝手な台詞が未だに通用するのでしょうか。うかつにもそんな甘言におだてられて生き地獄をさ迷った私たちのあの体験は、もはや六十年もの昔話になりました。当時の日本人は皆、未来永却二度と再び戦うまじと、我とわが身に誓いました。永世中立の国スイスに学べとか、バイブルの一節「汝もし右の頬を打たれな

ば左の頬を差し出すべし」とか、老子の「怨に報いるに徳を以てすべし」といった箴言がよく引用されたものです。

争いは仕かけなければ起こらず、仕かけられても応じなければ終わるものです。敗戦時のあの誓いは風化してしまったのでしょうか。風化しないまでも、あの大战を体験しない世代がすでに日本人の七〇八割にもなりました。永田町のお大臣まで若返ってしまいました。ブッシュ大統領も終戦の年、一九四五年の生まれです。民間人を巻き添えにしたとかしいとか、あれは戦争ゴッコの範疇で、相手を殺さなければ自分が殺されるのが戦争というものです。個の人権を蹂躪して顧みない国同士の戦争ほど非道いものはないのです。戦争の悲惨は体験しなければわかりません。そしてその戦争は常に浅薄な利己主義の付和雷同によって起こるものです。

国敗れて山河あり、と唄われたように、日本の敗戦にも山河は残りました。丹波も東京も、そして日本列島も残り、私たちは奇跡的な復活を果たしました。私たちを育てくれた古里があり日本の山河があればこそ成し得た復興なのです。

中近東のあの砂漠の民にも古里があるのでしようが、戦火に追われてあて途なく流れるあの難民たちの行方に、彼等の古里が待つのでしょうか。復活に手段があるのでしようか。

科学文明は今も日進月歩、長足の進化を遂げ、世界は一刻狭くなっています。精神的文化はどうしたことか、軽薄短小の軌道をひた走っているような気がしてなりません。

会場をつつむ丹波の和み

平成14年度「ふるさとの会」



平成十四年度「ふるさとの会」は十一月十七日(日)正午より九段会館にて総会・懇親会が例によって厳粛かつ賑々しく催された。

総会では、渡邊会長のあいさつのもと、役員改選が諮られ、十三人の新理事が選任されたほか、七人の退任が了承された。新任及び退任理事は下記の通り。

〈新任理事〉 (略敬称・五十音順)

浅倉成樹 足立和孝 足立知佳子 上田道代 植田茂樹
岡田昌子 直田 正 勢川武彦 谷垣悦夫 中居篤子
原谷洋美 丸川宥治郎 吉田勇司

〈退任理事〉 (略敬称・五十音順)

粕谷 進 田中 寛 千葉淳子 西川宣孝 細川利明
村上 昇 宮野 近

続いて会務報告、会計報告、会計監査報告があり、いずれも満場一致の承認を得た。

いつもなら満八十歳をお迎えの郷友に、お祝いを差し上げる祝寿の儀式があるが、今回は該当の方々どなたもご出席がなかったので省略。早速に懇親会へ移る。

懇親会では、関西氷上郷友会副会長植田憲雄氏にお言葉を頂戴した。軽妙洒脱な語り口で、六町合併の話題を中心にふるさとの近況を紹介して頂き、聴く者はたちまちにして丹波の森を徘徊している錯覚に陥る。

続いて兵庫県東京事務所次長森岡強司氏からも「兵庫県の丹波施策」に関する話があり、急速に変化する故郷のありさまを実感させられたことであった。

乾杯は吉住自由造(旧名重造)さんをお願いした。氏は大正五年生まれの万年青年。十八にも上るさまざまな会の面倒



渡邊會長挨拶



吉住氏 乾杯挨拶

を見ながら、どの会合にも欠席したことがないという。盃を一気に乾して食い、かつしゃべりの懇親会本番へ。予定の三時間はあつという間に過ぎてしまう。

懇親会名物の「お楽しみ福袋」と「夢の抽選会」には、

今年も大勢の有志の方から、数々の景品をご寄贈頂いた。心から感謝申し上げます。なお、県立氷上高校からは、毎年同

校の生徒達手作りの味噌と醤油の寄贈にあずかっている。

「とてもおいしい」と評判で、地元ではつとに有名である。

幸運にも引き当てた福袋に、この兵主の杜からの贈り物が入っていたら、葉書一枚でもいい、「おもしろかったよ」の一言を伝えてやってもええないだろうか。明日を担ってくれる若者達にとって、きつと励みになるに違いない。

午後三時、藤田純氏（丹波ゴルフ会の名幹事としてつとに有名である。）の三本締めでお開きとなり、語り足りない人たちの群れは、思い思いに二次会会場へと姿を消して行く。

（坂上勝朗・記）

●平成十四年度「ふるさと会」出席者（順不同・敬称略）

〈来賓〉（三名）

植田憲雄（関西氷上郷友会副会長）

森岡強司（兵庫県東京事務所次長）

橋本清春（兵庫県東京事務所課長）

〈会員〉

◆青垣町（三名）

足立静雄 篠原よね子 安原三智子

◆市島町（十一名）

大槻作治郎 荻野武 片岡クミ子 木村つた江 近藤勇

高見嘉都司 高見秀史 鶴田ゆき子 藤田純 藤田徹

丸川宥治郎

◆柏原町（十五名）

生田清弘 生田正輝 植田茂樹 上村愛子 岡田昌子

岡吉明 小田晋作 小田富士夫 可部美智子 高尾久子

谷垣悦夫 常岡幹彦 徳田八郎衛 山本明男 村上善英

◆春日町（五名）

足立知佳子 井本馨 木呂子恵美子 前田武彦

吉住自由造

◆山南町（九名）

池田忍 小田明子 久保春雄 千葉淳子 仲一聡

中居篤子 原谷洋美 増井攻 渡邊貴美子

◆氷上町(十六名)

足立明子 足立吉雄 安達健一郎 安達巧 上田道代
 上野重喜 岸本勲 岸本昌子 岸田勇 小山とし子
 坂上勝朗 谷口捷 谷口浩章 仲矢恵美 本城英明
 渡邊隆男

片岡クミ子

おかき

一〇箱

◆西脇市(二名)

大石佐代子 小糸イキ

●お楽しみ福袋景品寄贈者(敬称略・順不同)

渡邊 隆男 書籍「一日一書」
 常岡 幹彦 だし醤油
 木村つた江 ロッテ チョコパイ
 坂上 勝朗 新巻鮭
 足立 静雄 草加せんべい
 小田富士夫 黒豆つくね
 木呂子恵美子 坂口のあられ
 岸本 勲 ハンドタオル他
 鶴田ゆき子 明治ミルクチョココレート
 芦田 重秋 せんべい
 足立 吉雄 殻つき落花生
 岡 吉明 丹波焼き豚
 岡林 逸男 榮太楼の飴

一〇冊

一打

五〇箱

五本

二箱

一〇袋

一〇袋

一四品目

八〇枚

二〇箱

二〇袋

四箱

三箱

久保 良雄

海洋カレンダー

三〇部

高見嘉都司

新宿中村屋かりんとう角缶入り

一〇缶

高見 秀史

ワイン

五本

谷口 浩章

小倉山塩こんぶ

六個

千葉 淳子

丹波大納言小豆

一〇袋

徳田八郎衛

ワイングラス

一セツト

仲 一聡

ウーメン(温麵)

五袋

西川 宣孝

京風堂のお菓子

一箱

藤田 徹

5指健康靴下

三〇足

細川 倫夫

鳩サブレ

五箱

本城 英明

アメリカワイン、ミニバッグ

各一個

前田 武彦

煮物鉢5客

一セツト

吉住自由造

創元推理手帳

七冊

足立 和巳

日高昆布

一〇束

荻野 武

榮太楼の飴

一〇箱

梶原 清

篠山清明堂の黒豆おかき

五箱

篠原よね子

篠原よね子刺繍作品集

三〇冊

藤田 千治

栗赤飯2袋入り

一箱

村上 末吉

狭山茶

五袋

生田 正輝

北村園味付けのり

一〇缶

生田 正輝

播州名産うどん

四〇束

徳田直三郎

ロイヤルゼリー

五〇本

大野 善三

書籍「医療の質」

三冊

氷上 高枝

自家製味噌

一〇袋

同醤油一リットル瓶

一〇本

上野 重喜

小型カメラ

四台

中居 篤子

ヨクモック

一〇箱

水船 隆昌

テールラーメン

五〇パック

タンシチュー

二〇パック

井本 馨

赤絵花文和皿5客

一セット

藤田 純

清酒「辛丹波」

一本

可部美智子

ぐい呑み

一個

関東水上郷友会

丹波山芋3kg

五箱

丹波黒大豆1升入り

五箱

(今年もよろしくお願いいたします。)



郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりをも、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い申し上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のきずな』の強さを思います。

(山ざる編集部)

祝寿の方々ご紹介

郷友会では、毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる九名の方々に、以下の項目につきアンケートを依頼しました。そのうち、三名の方々から回答いただきましたのでご紹介します。

(順不同)

〈アンケート項目〉

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年〳大正12年・亥歳・1923年〉関東大震災の年として記憶される。この年9月1日、午前11時58分、伊豆沖30kmの海底を震源とするM7.9の激震が関東一円を襲い、死者約10万人、全壊焼失家屋46万という未曾有の大惨事となった。

生地の丹波地方には全く影響は

なかったが、首都東京が壊滅した

ことにより皮肉にも商都大阪に繁栄をもたらし、丹波地方にも近代化の波が押し寄せた。同時に復興に取り組む東京では震災を契機に生活面でも一段と洋風化が進んだ。

〈満20歳の年〳昭和18年〉この年2月のガダルカナル島撤退を皮切

生田 正輝様

① 大正12年2月6日

② 氷上郡柏原町下小倉

③ 昭和16年3月

④ 慶應義塾大学予科入学のため

⑤ 私の今日までの人生に、決定的なインパクトを与えた二つの出来事がある。その一つは、昭和

りに、山本五十六司令長官の戦死、アツツ島玉砕と戦局は悪化をたどりはじめた。この年満二十歳を迎えた大正12年生まれの男性は学徒出陣などによって戦地に駆り出され、多くの戦死者を生んだ。

〈還暦60歳の年〳昭和58年〉この年4月からNHK朝の連続テレビ小説「おしん」が放映され、我慢・忍耐・辛抱の代名詞となった。時代はまさにこのドラマとは逆方向に進みつつあり、日本人が失った古き良きものへの憧れともあった。

十八年十二月一日の学徒動員に

よる陸軍入隊であり、その後の二年間にわたる軍隊生活である。およそアカデミズムとはかけ離れた軍隊生活が、私の学問への渴望をかきたてずにはおかなかった。その第二は、昭和三十五年六月から一年半余のハーバード大学留学であり、欧米遍歴であつ

祝寿の方々ご紹介



上田 譲様

にと、家内と共にせっせと海外旅行に出かけたり、ゴルフを楽しんでる。

を迎えましたが、今年の五月に妻が病死してしまいましたので、傘寿の喜びもどこかへ消えてしまいました。

桂 照子様

た。これによって、私の研究の方向は決まったし、大きな発想と転換を経験することができたと思っている。

⑥ これまであまり年齢のことなど考えなくて過ごして来たが、さすが八十歳ともなれば、時にそれを意識するのも当然であろう。最近では、出来る限り仕事から遠ざかるようにつとめてはいるが、まだいくつか解放されないものが残っている。それも老後の御奉公と思わないでもないが、これからは我儘を大いに認めていただいで、気儘に余生を楽しみたいと念願している。元気な間

① 大正12年2月17日

② 氷上郡春日町棚原

③ 昭和17年4月

④ 入学のため

⑤ 広島県加茂郡の海軍衛生学校に

在学中（私は海軍の依託生であった）昭和二十年八月六日の原爆

の様子を目の前で見た経験。

（爆心地から離れていたのので今

日まで健康でいることができた

こと）昭和六十一年秋藍綬褒章、

平成六年勲五等双光旭日章を戴

いたことでしょうか。

⑥ 八十歳まで生きるとは思いもしま

ませんでした。やはり国領の進

修小学校、柏原中学時代が懐か

しいです。夫婦そろって八十歳

① 大正12年3月5日

② 氷上郡氷上町成松

③ 昭和38年4月

④ 夫の勤務、転任のため

⑤ 先の大戦のこと。夫を南方に送り出し、生死もわからないまま

終戦後、まる二年余たつて無事

復員し、新しい生活をはじめた

こと。また戦後の物資のない中、

子供達を力一杯育てて来た日々

のなつかしい思い出。

⑥ 無事八十歳を迎えることができ、

感謝しております。日々体調に

気を付けながら、残る人生をしっかりと

生きたいと思っております。

懇親会 スナッフ。





会 計 報 告 書

(平成14年7月1日～平成15年6月30日)

関東氷上郷友会

会計理事・谷口 浩章

鶴田ゆき子


(単位：円)


収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	1,886,804	郵便貯金 1,086,804円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出 版 費	1,057,609	『山ざる』33号
			通 信 ・ 印 刷 費	168,015	総会・役員会案内等
年会費収入	432,000	延 205名	総 会 費	512,652	総会関係支払
総会費収入	427,000	61名	会 議 費	337,734	役員会等
役員会費収入	155,000	延 43名	支 払 手 数 料	17,085	振替手数料 14,460円 送金手数料 2,625円
編集会費収入	0				
寄 付 金	145,740	延 33名	消 耗 ・ 備 品 費	57,414	
広告料収入	817,500	延 68名	繰 越 金	1,832,668	郵便貯金1,032,668円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
受 取 利 息	119,133	郵便貯金 48円 定額貯金 119,085円			
合 計	3,983,177		合 計	3,983,177	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成15年8月4日

会計監査

足立和巳 

谷口 浩章 

●寄附者芳名

高見嘉都司殿	尾上典世殿	上野恵三殿	上田道代殿	生田清弘殿	村上末吉殿	藤田純殿	塚口智殿	谷口浩章殿	谷口捷殿	近藤勇殿	荻野武殿	池上忠弘殿	足立誠一殿	堀井隆川殿	森岡強司殿 (兵庫県東京事務所)	植田憲雄殿 (柏陵同窓会長)	中藤絃耀殿
三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	七〇〇〇円	八〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	一〇〇〇円	二〇〇〇円

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。

●

テーマ：①ふるさと随想
 ②近況エッセイ
 ③会員だより（短信）
 ④催し（個展・同窓会など）
 ⑤丹波を撮る（写真）など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切りは平成16年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度

送付先：〒247-0005 横浜市栄区桂町1-1-1-101
 (株)ホンゴ出版内
 『山ざる』編集部
 TEL 045-895-2712
 FAX 045-895-4338

■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

千種倫幸殿	鶴田ゆき子殿	出町京子殿	中村武子殿	畑雅樹殿	婦木一男殿	山口和久殿	山本喜則殿	梅田修故殿	稲岡俊一殿
三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	三〇〇〇円	二、四〇〇円	一、〇〇〇円

木呂子恵美子殿	坂上勝朗殿	小糸イキ殿	塩見みつゑ殿	千葉淳子殿
一〇〇〇円	一〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円	五〇〇〇円

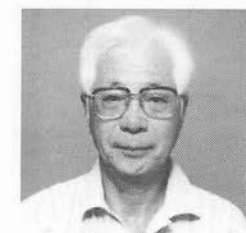


ふるさと 随想

『鶴牧藩日記』

— 丹波領分和田代官所記録 —

梅田重一（山南町）



我が家の御佛壇の下に、一冊の本と、一振りの「脇差し」を飾っている。『鶴牧藩日記』（古西義麿編、清文堂昭四七年刊）、脇差しは一尺三分、銘「吉平」である。

◆ 『鶴牧藩日記』

正徳三年（一七二三）から文政十二年（一八二九）末まで百十七年間、梅田家の先祖が五代にわたって書き綴った、代官所の記録である。卷子一卷、和綴三十丁の資料で、近年まで人々の手を転々としていた。故木戸源治郎氏が山南町助役時代に収集し保管された。関西大学史学科の協力で翻刻されたものである。執筆

した五代にわたる著者は、いずれも梅田家直系の人々である。『氷上郡志』には次のように要述している。

「梅田氏は本姓谷氏にして谷出羽守の庶流なり。

家系によれば、出羽守基綱が功により至徳二年丹波国市場庄（山南町和田）の地頭職となる。数代の後、永正元年より和田と称す。その後、斉頼の曾孫が初めて梅田と称す。爾後連綿として、本村に勢力を有せしが、藩政時代に至り水野氏の此地を領するや、その幕下に属し、野添・大島等の諸氏と共に、代官所の枢機に与かりたり」

これによっても百有余年間の代官所の詳細な記録が残されているのも、頷かれる事である。

日記の内容は、和田村の出来事であり、近隣の人々の姓が随所に出て、懐かしく面白い。明和七年に梅田家の本家が新築され、屋敷内の稲荷大明神に施主の保基は、

五すしをむすぶ御注連の雪哉

社の日の出の永字八方

と榎の板に墨書し収めたという。

ところが、破局のおとずれは、意外に早かった。寛

政九年八月『身上不如意二付、居宅之義売払候』ほどのこととなった。私の実家は小商売人で、貧しかった。しかし、庭に分不相応な祠があった。近年崩れ落ちたが、中から出て来たのが、榎の板に書かれた、前述の『御詠歌』である。

◆『脇差一振り』

子供の頃から、大小一對の日本刀が納屋にあったのを覚えていた。終戦になって、銃砲刀剣は没収される事となったが、小刀は保管した。昭和三十一年に文化財保護委員会に登録した。その後、刀剣店で、刀袋を買って求めたが、店主が「銘」は何かと言う。「吉平」だと答えたら「それは天下の三平と違って、本物であれば大したものだ。先ず本物である筈はない」と鼻で笑った。

最近「何でも鑑定団」の「お宝ブーム」である。時々見ているが、鑑定して貰う気持ちはサラサラ無い。

『居宅売払候』程の事になった先祖が、高価なものを身につけていたとは考えられない。ただ『温故知新』先祖にゆかりのある、この二品を大切に、子孫に伝え

たいと願っている。

鶴牧藩（江戸時代）以前の和田村は、正確な記録もなく、浅学であるため定かでないが、庄組織で地頭職が治めた源氏平家の混乱期、戦国時代は、丹波八上城（篠山城）主、波多野一族の支配下、その出城の蛇山岩尾城（和田城）が、明智勢の丹波攻めで落城した。軍門に下った者は、姓を改め、郷士となったり、帰農して、時々権力者に従った。梅田家も谷一和田一梅田と改めて、一族の余命を繋いだのであろう。

永年、丹波新聞社の記者として活躍された故梅田健治郎氏によって、自費出版された「梅田家の歩み」と題するルーツ探しの二部作が手許にある。この二冊も大切に保管している。私の父は、和田上町の吉田家よりの養子であり、母は春日町の荻野家より嫁いで来ている。本来の血統は切れているが、祖先を敬う気持ちには変りはない。

近年、業績を再認識された伊能忠敬は、文化十一年（一八一四）正月八日から約一ヶ月にわたり、鶴牧藩丹波領一帯の測量を行なっている。

忠敬自筆の「測量日記」によると、

正月八日四ツ時 和田村江着、止宿。
本陣

鯛屋金蔵 当村に水野老岐守
脇 弥一郎 出張の陣屋あり

右出役 梅田 銀蔵

井上 範八 出

とあるのを附記したい。



K君へ、あの頃そして今

井 本 義 一 (柏原町)

前略 お互い古稀を明年に迎える年齢となった(君は明後年だった?)が、一九五〇年(昭和二五年)から六〇年頃までは、我々は多感な青春を謳歌した時代ではなかったろうか? 前後するかも知れないが、戦後解放・復興から経済も高度成長期へのはしりとも言える、古く懐かしいあの日あの頃を想い出すままに。

#

焼き照りつける真夏の休日、我等仲間誘い合い水泳に。当時パンツなどなくて「キンツリ」をつけて、柏原中下の昭和池から小南の梶立柏原病院下の池や、北中?の今丹波の森公苑上の池へ泳ぎのハシゴをして真っ黒になって泳いだね。

水面がシーンと静寂に包まれ、水中に足を引き込まれるような恐ろしい思いをした瞬間、かいつぶり?(水鳥)が水中からポツクリ出てきて驚いたこともあつ

たね。また当時の柏原川は堰近く以外は浅くて、魚とも両岸の茂み、その下水中の石の下に潜んでいる鮒、鯉、鯰、どじょう、時には鰻も「にぎり」といって、網を使わずに両手を水中に入れて、静かに左右から魚のいそうな所に動かして触感だけが頼りのつかみ取り時、魚の腹部に触ったときの、あのドキドキの感触は今も忘れないね。またザリガニに手を挟まれてびっくり、短パンの尻を水中につけたこともあつたね。岸に大木が川面にせり出してきており、その枝にロープをかけてのターザン遊びも忘れられない思い出だね。

#

ダンス音楽を中心に毎週日曜日の夜だったか、S盤アワーなどのラジオ番組に傾倒してジャズ、スウィング、タンゴ、ワルツ、ジルバ、マンボ、サンバなどを当時数少なかった喫茶店に、我等仲間相集い、寒いクリスマス・ウィークの連夜を夜更けまで聞き合ったもので、それが我々を映画に社交ダンスにのめり込ませた一歩だったと今にして考えるが、どう思う?

当時、柏原のダンスホールは屋敷と本町にあり、ステップの講習会も盛んでヤング層のみならず、奥さん

達もかなり来て居られてステップを教えてもらったね。スピントーンの時などはじめて母以外の豊胸に接して、ときめいたのも若き日の思い出だね。

青年団時にうつり、雪の厄除け大祭の日に団の活動資金稼ぎに、二日間連夜にわたり学校の講堂を借り切り大ダンスパーティーと銘打って興行し、大盛会に終わった時は、ほんと達成感の極みだったね。

あの頃、我々仲間で福知山で映画を観てからダンスホールへ行つたね。踊って欲しい人に申し込んで、あっさり断わられてバツの悪い思いも何度かしたね。帰りは大阪から最終の列車で帰り、両親に怒られながらよく行ったものだね。ともかく青春の悩み多い中で、何かに打ち込み発散したくて私の場合、勤務先が自宅から近かったのもラッキーだったと今にして思う。

#

毎年恒例のように、早逝した友と元旦の早朝、今青垣町の粟が峰に登山したこと、といつても二、三年で途切れたが……。登山口の村まで単車を乗りつけてそこに駐車、郡内一の高山への挑戦ということで、何か清々しく身体が引き締まる感じで、登るにつれて時に

は新雪がうつすらと高山笹の大ぶりの葉っぱの上に積もっていて厳しく冷たい寒さの中を突き進むような気持ちだったことを改めて思い出す。

#

以上、あの日あの頃のあれこれ进行い出していると、ふっと涙が出そうになるのは私だけだろうか。出てこないか君も!!。

そして今、水について月の半分を水中ウォーキングと水風呂（水風呂は休日を除いて毎日）で。水中ウォークは後進、前進を各一〇分間。特に路上を含めての後ろ向き歩行は、聖路加国際病院の日野原先生も提唱されている「年を経るに従い新しいことに挑戦する」生き方に、私にとっては合致していると自負しています。また水風呂の効用は、嫌なことが多いこの世の中、ストレス解消、気分一新にと風邪を年間を通して全然と言つてよいほど引かないことです。加えて路上ウォークのとき、両手を大きくグー・チョキ・パーをしながら腕を振っていますが、体調維持にいいようです。

#

歌は、四月十二日、君をはじめお世話役諸氏のお陰

で、大盛会（一〇七名出席）であった。われら柏高五回生（昭和二十八年卒）卒業五〇周年記念同窓会の翌日、弟妹七人と五十年ぶりで高谷公園で花見のあと、カラオケに連れて行って貰ったが、私が一番下手で、この原因はここ四年以上歌ってないこともあるが、ご当所では公民館のカラオケ教室などで、皆が定期的な新曲も教わり練習していると聞いて、正にカルチャーショックを受けたことでした。近頃年の所為か歌謡曲、ニューミュージック、フォークソング系の歌の、おそらく作者が心血を注いで作られたであろう作詞に興味を持って聞いています。主にラジオで、直ぐに忘れまので、枕元にメモを置き曲名、歌手名、作曲者名などをメモっています。

順不同で「神田川」「私鉄沿線」「人生一路」「岬めぐり」「卒業写真」「なごり雪」「心の旅」「四季の歌」「翼を下さい」「いい日旅立ち」「マイウェイ」「昂」「川の流れるように」「愛しき日」「トモロウ」「あかろんぼ」「いつでも何度でも」「山河」「傘人中」などで、ときにはあの日あこのころのわが人生を投影させて詩情を楽しんでいます。テレビで下に字幕が出るのも詩歌

を味うのにとっても嬉しいことです。

#

映画はシルバー料金の恩恵で、自選、月一本をメドに十四年十一月から。「千と千尋の神隠し」十一月、「たそがれ清兵衛」十二月、「ギャングオブニューヨーク」一月、「戦場のピアニスト」二月、「キャットミイ・イフューキャン」三月「シカゴ」五月と観てきて、あの日あこのころの映画に比べ、画面は大きく鮮明で美しいが、音響効果が迫力があり過ぎて騒々しく感じるのは私だけだろうか？ 自分にとって未知のさまざまな人生の扉を、映画が開いてくれるのは嬉しいことです。

#

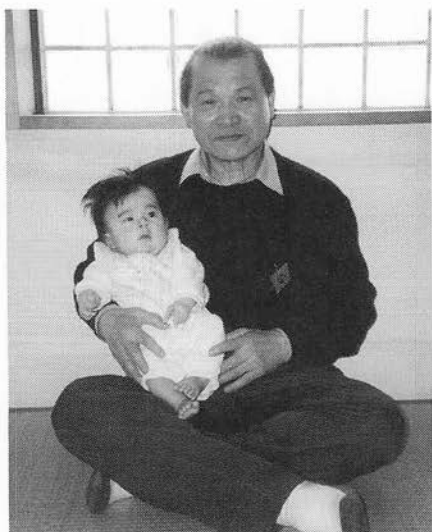
登る脚力も六十歳過ぎまでは少し助走すれば、駅の階段も上まで四段前後跳びで駆け上がったものですが、昨十四年十一月に二番目の孫（八年ぶり、初めての男孫）の成長ぶりを見て、赤子の手足の力強い動き、腹ばいになり手足の動きが追いつかないのに、前進しようとする元氣一杯のそれを観る時に、私は肉体的に衰えてきて当然と素直に受け止めたいと思っています。

その上で文字通り元の氣々元氣を、孫に限らず様々

な事象を観て、自分の精神面に頂戴する感性を、鋭く
培い維持したいと考える今日このごろです。また、こ
れからは可能な限り健康体でいたい、病・老・死を
考える時に、やはり気力が、それも明るい気力（それ
は旺盛な好奇心と、周りにとらわれずあるがままに、
の気持がベースになると思います）を持続することが
肝要ではないだろうか？君はどう思う？

#

最後に携帯電話やメールがなかった青春時代を過ご
したことを今にして「よかった」と、是非つけ加えて



孫を抱いて筆者

置きたいと思います。何故よかったかって、今は総括
的な感じだけど「こらえ性のない」こと。無気味に増
え続けているネット自殺に象徴されると思うが、あま
りにも短絡的ではないだろうか？ 勿論超便利になっ
たとの議論はさておいて。「情緒」や「潤い」などの
言葉を見聞きしない時代になったと思う。手紙を例に
とつても出す、受取るにそれぞれ「間」があり、その
間が喜びや苦しみなどを増幅し、それぞれの人生の深
みを織りなしたと思うが、今の若い人たちにはどんな
“間”があるのだろうか？

こんなことが気になるのは、時の過ぎゆくままに自
分が時代遅れの人になった証明でもあるのだろうか？
それはそれでよいと考えている昨今です。

四月十二日は草臥れてるところを、夜喫茶店に呼び
出してすまなかった。二年ぶりで語り合って嬉しかっ
た。では再会の日までお元気で。GOOD LUCK!

草々

（薫風の五月二十五日記）

父と丹波

西畑健一（春日町）

僕と丹波との関わりは、父が大路（現春日町下三井庄）の出であることによる。明治三十六年生まれの子の粹の明治人で、山村の農家の次男坊。ちなみに父の兄弟は五人で、二人の弟に姉と妹。幼くして口べらしに京都の親類に預けられ、小学校を出るとすぐに織物問屋に奉公に出される。

当時は、なんといつても和服全盛期、なかでも京呉服は高級品で、時あたかも、世界大戦後の好景気で織物業界は活気を呈し、丁稚小僧から番頭までのこの頃の父は、徒弟制度の中でもそれなりに青春時代を過ごしていたようである。大正末に東京に支店ができ、父はたまたまその店に来て関東大震災に遭っている。

昭和五年に父は結婚し、東京の店に移る。翌年、僕が生まれた。昭和初期には新しいデパートが次々と開店する。父は販売主任として、そのデパートの仕入部

に西陣の帯などを納めていた。大恐慌、戦争、統制などさまざまな経過があったが、父の仕事の関係で、僕はずっと日本橋で少年時代を過ごした。

昭和二十年三月十日の大空襲で戦災に会い、丹波に疎開して、旧制の柏原中学に通い、学制改革で新制となる高校を卒業するまでの五年間を丹波で過ごした。僕はつまり丹波からいえばハーフのようなものなのである。

*

先日、僕たち夫婦は娘と塩原に旅行した。宿の布団の中で、箒川の水音を聞きながら、ふと父が使っていた坐り机の引出しに木の葉化石があったのを思い出した。また、父の古いアルバムに、店の慰安旅行で行った塩原温泉の記念写真があり、鳥打ち帽を被った姿が写っていたのを覚えている。木の葉化石は、おそらく父の若い頃の記念だったのだろう。

その机も木の葉化石も戦災で焼けてしまった。父は老衰で九十四歳で亡くなり、すでに七年が経とうとしている。

ストリップがやって来た!

徳田 八郎衛 (柏原町)

国や県の出先機関が多敷置かれた柏原町は小さな「政治都市」であったが、同時に旧制中学校や女学校も設けられた「文教都市」でもあり、さらに柏原の人の自慢は柏原劇場の存在であった。鉄道の駅や銀行なら黒井や成松にもあるが、例え脱いだ履物を手に持つてゴザの上に座り込む「劇場」であっても、映画や芝居という芸術に毎日でも触れることができるのだから。そこへストリップの地方巡業がやってきたから静かな町は大騒ぎになった。ちょうど半世紀前の秋で、私は中学三年生。今では北朝鮮の拉致事件が大きな関心と呼んでいるが、当時話題となったのは、李承晩ラインで日本漁船が韓国警備艇に次々と拿捕されていくのに巡視船が手出しせず黙って見詰めている情けない姿だった。

おったまげたのは柏原の街中の人々だけではなく、

村落の人々も同様だった。というのは、柏原劇場の広告を張り出す場所が各部落に一箇所ずつあったからだ。昭和二十年代後半ともなると、私が小学生だった二十年代前半とは違って田舎芝居はほとんど上演されなくなり、専ら映画の広告がほぼ一週間貼られていた。それに代って「ヌード界の女王、ヘンリー松原来る」と記した刺激的な広告が民家の壁に登場するのだから驚くはずである。

一週間ほどの小さな嵐だったが、私の記憶にこの嵐が未だ残っているのは次の三つの出来事があったから。まず先生方の反応に驚いた。小学校へ入学したころは、職員室というのは聖地というか、少しピリッとした場所、あるいはピリッとしなければならぬ場所と思っていた。だが卒業する頃には、俗世界にかなり近い場所と認識するようになり、さらに松原女史公演騒ぎで職員室も俗世界そのものだと思うようになった。後に今田中学や青垣中学で校長を務められた藤本正也先生は中三の社会科を担任しておられたが、授業中に突然、男子生徒の席へ「君らー、ここで裸になれといわれて直ぐ裸になれるかい」と問いかけられた。や

れルソーの人権論、やれモンテスキューの「法の精神」という話から突然脱線した質問に皆がボカンとしていると、藤本先生は回答を先取りして「男でさえ人の前で裸になんかなんの嫌やのに、女が人前で裸になって踊り狂うというんやから、これは正常な精神の持主とは思えない」と切つて捨てられた。謹嚴な藤本先生でさえ、こんなアホ話を持ち出されるのだから職員室も相当熱に浮かされているな、と生徒たちは結論づけた。

次の出来事は「柏原中学校文通友の会」設立である。同級のY君が、この会の設立推進者だった。私は「文通なんか個人競技のようなものだ。友の会などという集団でやるもんやないよ」と脚を引張ったが、すでに西独やカリフォルニアの高校生と文通している凄いやつと目されて何とか部長に任命されてしまった。もちろん会長はY君で顧問は藤本先生。そして郵便局長まで来賓として招聘し、賑々しく発会式が挙行された。入会予定者に用紙を配布し、文通希望国や自分の趣味、得意な学科等を記入させたら趣味欄に「ヘンリー松原」と記入する者が現われた。「こんなこと書いたら他人がアホかと思うじよ」と説得して書き直させたが、発

会式と彼女の公演は同じ週だった。

三つ目は事件というよりも私なりの疑問である。大河内伝次郎とか嵐寛十郎とか日本人らしい立派な芸名があるのに、戦後は日本人か米国人か不明なカタカナ混じりの芸名が跋扈し始めた。それでも男は男の名、女は女の名を芸名とするのに何故、松原女史はヘンリーと名乗るのだろうか。

「そんな難しいことを君のように考えとる人はおらんよ、もともと正常な精神の持主やないもん」と友人たちは一笑に付した。だが、このヘンリーさん、男風の名前は伊達ではなく、丹波巡業を柏原だけでは終えなかった。後年に至つてから和田出身の友人が教えてくれたが、何と和田中学校の校舎落成式にも招かれて校庭のテントで上演したそうである。

おおらかな時代だったのだ、という人もいるだろう。だが私の記憶では当時は決しておおらかな時代ではない。今の方が明らかに破廉恥で、見方によってはおおらかである。あの頃は、男女中学生が「桃色遊戯」に耽つた責任を取って自決した中学校長もいたのだ。だから丹波という土地がおおらかだったのだろう。

丹波に関わる三題

谷 口 捷（氷上町）

自分のような歳になると、人間は後世の事を考えるようになるらしく自分も何かを残して置こうと、長い間の作文コンプレックス克服に頑張っている。先日柏陵同窓会で、『山ざる』誌の原稿募集があったことでもあり、丹波に関係するを書いてみる。

◆「温故知新」

六十歳になった時、気力体力の衰えを感じ、自分の好きなことをさせて頂くと決意し、会社の仲間に給料も机も不要と宣言した。どうせすぐ退屈して出てくると信じてもらえなかったようだが、会社に顔を出すのは年に数回となった。それにもかかわらず、何かに急かされるようで忙しい。思いたくもないが、寿命が残り少ないと感じているためだろう。

最近各地の古き良き所を歩いている。足利尊氏の

里、足利学校に行き、「学校様通り」という案内を見て、土地の人々がいかにそれを大切にしているかを感じる。

金沢八景の金沢文庫とか、小田急線栢山で二宮尊徳の地を訪ねて、さすがと感心するものを発見したりしている。残念なこともある。千住の旧日光街道へ行ってみたが戦災で全部消失してしまい、石碑のみで往時を偲ぶだけであった。昨年二月、日本経済新聞文化欄で、和算の問題が掲載され、早速エレガントに解いて欲しいと便りを寄せて下さった知人がいた。それを試みたのが契機となり、和算に興味を持つようになった。首を突っ込むと、非常に重要な意味を持つ世界である。江戸時代にヨーロッパ、中国よりも進んだものを作り上げていたことは勿論だが、一般に有名な関孝和だけでなく、江戸以外でも近畿学派とか各地で進んでいたことである。

今年の一月初九日の丹波新聞「丹波のひと」にも、篠山出身の「万尾時春」の紹介が大きく載っていた。深く入ろうとすると困難な問題が立ちふさがる。それは古文の解読と高価な文献である。やむを得ず研究会で

知り合って以来数十年の交友、東京大学工学部出身で専修大学教授佐藤創氏に相談に行くと、数学会でも最近見直されているのですと、厚い書籍を貸して下さった。それにも上記、万尾時春の業績が出ている。

余談だが、佐藤氏は柏原高校出身の学者故坂本重雄氏が静岡大学から専修大学に移られたとき「今お世話になっている先生は丹波出身の方です」といち早く教えてくれた友人である。このように私をして古きものに関心を向かわせるのは何なのかと思っていた。

今年の氷上郷友会に出席すると、渡辺会長が挨拶で「温故知新」のことを語っておられた。無意識に私もこれを求めていたのか、さすがに教養のある方は違うと感心した。

最近、柏原出身の建築家八木大児君から立派な著書『ともし火とそれに近いあかりの諸道具』を送って頂いたが、彼もそのような気持でおられるのだろうかと思ひ、改めて書籍を拝見し直した。

丹波の若い人達も出来るだけ、郷友会のような機会に積極的に出席されて、先輩達の話聞くことも大切ではないかと思つた次第である。

◆丹波紀行

本年五月連休前、叔父の法事で丹波に行く機会があり、以前から頭の中にあつた山陰街道を訪ねようと決心する。京都丹波口から亀山を通る道を考えていたのが、時間的な制限で福知山から和田山までに決める。

東京から急行寝台「出雲」に乗り朝五時二〇分福知山に着く。案内を買つてくれた兄夫妻の車で、このような早朝に行けるのはこしかなないと観音寺に向かう。この寺は以前テレビ黄門様にも登場し、ぜひ観たいと思つていた。最近出版されている週刊『日本の街道』によると、通称「アジサイ寺」養老四年（七二〇）天竺の僧法道仙人創建とある。丹波新聞五月二十五日の記事によると、住職は柏原高校に勤務されていた小藪実英氏である。目の病が治つた地元女性がお礼に植えたあじさいが契機となり、丹波一円の信者から苗木を一株ずつお供えして貰ひ丹波アジサイ寺の始まりとなつたとある。

以前より小藪氏の詩画「心の日めぐり」は読ませて頂いている。早朝で我々のグループの他に誰も居ないと思われた境内で、一人の女性がお参りに来られた。

それがなんと兄嫁の実家の奥様で、帰りに寄って下さ
いとお言葉に、有難く休ませて頂いた。

次に福知山城に向かう。石垣の一部に墓石まで使わ
れているという城で、明智光秀の改築したものである。
明治の廃城令で取り壊されたが、昭和六十一年に復元
された。城内の一角には、先日の柏陵同窓会で白井小
五郎氏が講演された元首相芦田均氏の関係コーナーが
あった。

次に明智光秀の霊が合祀されている御霊神社へ行く。
全国区では謀叛人だが、丹波では神様である。このよ



うなことを許している社会、日本を私は好きである。
これを強制されたり、逆に禁止されるような社会は御
免である。全員が同じ方向に向わせられているような
社会は嫌いである。常に物事には表裏があり、多面性
があることが多い。

次に向かったのは、念願の和田山竹田城跡である。

これは全国屈指の山城遺構で山名宗全の家臣大田垣の
築いた城郭とある。登ってみて、本当に感動するもの
であった。「ここはこのままで、変にコンクリートの
城を創らない方が良い」という独白に、傍らにおられ
た全く知らない人から賛同して頂いた。城の麓には、
城主達の墓がある四つの寺が水の流れに沿って立ち並
ぶ城下町寺町通りがある。向かいの山は立雲峡という
桜が群生している公園であり、今流行の言葉「三位一
体”見事な所である。丹波近辺は道路が狭いためか、
観光に毒されていない良い所が多い。

今回は私の趣味からの紀行であったが、振り返って
みると、今まで丹波紀行は三回行っている。第一は
『山びこる』29号で記したが、この時同行したのは、学
生時代からの友人で、現在は桃山学院大学の学長をさ



れ、大学改革に苦勞されている村田晴夫氏である。もう一回は、三十数年前に研究会で一緒になって以来の知人、しかも最近町内会が同じになった専修大学と早稲田大学で教えておられる坂本実氏である。丹波に関心を示す知人に学者が多いのは、丹波の先人に立派な学者が多いためであろう。

私が社会人として初めて勤めたのが小野田セメント株で、その時に名前を知ったのが丹波出身でセメントの権威である永井彰一郎氏であった。文化勲章受賞者の小谷正雄氏は「物理学の神様」と東大理学部出身の知人が称していた。先日の柏陵同窓会で話をされていた化学御専門の大木道則先生は子供の頃より、母から聞かされていたお名前である。

このように故郷出身の立派な方とお会い出来る同窓会があることは幸せであり、若い人にとっても大切なことと思う。しかるに、柏陵同窓会に若い人の出席者が少ないのは誠に残念である。

◆故大槻隆追悼記後記

本年四月に、故叔父大槻隆の法事が丹波であり追悼

記を書いた。柏陵同窓会会長植田先生が葬式で「百周年の大仕事で、私が命を縮めたようなものだ」と涙して頂いた時に決心したものが今となった。内容については、法事の席で二人程立ち上がり「もう少し詳しく書け、あれが抜けている、あれが書けていない」と言うて下さった。

一つは当時の婦人雑誌『主婦の友』に紹介された「獄中結婚」のことである。これは資料が手元になく求めようとしている間に失念したものである。もう一つは、非常に希有な叔父との旅行富士登山であった。大槻家を継いだ私の弟だけ、何故か抜けていたのが話題となった。その場では不明であったが後日思い出した。当時、今日のように富士登山はポピュラーでなく、男全員では万一のことを心配をして、叔父と母が相談し保険を掛けたと聞いていた。

今から考えると、神経質と思えるほど人生に対して慎重になっていたのであろう。私自身も、他に書いたら良かった書くべきだったと思うことが次から次へと出てくる。特に叔父の母、私からは祖母のことはもう少し書くべきだったと思うし、心残りは叔父に宛てた

祖母の手紙を見ずに書いたことである。可能なら今も見たく思っている。私にとって両親にも優る人であった。腕白であった私が家に入れてもらえず、牛小屋で寝ながら「最後は前山のオバアチャンの所がある」と心の支えにしていた人である。しかし、最近読んだ小説『蟬しぐれ』で、主人公が切腹する義父に対面し、何も言えず後悔する場面で「そういうものだ。人間は後悔するように出来ておる」と藤沢周平さんが書いておられる。これで自分を慰めている次第である。身内にだけと思い気軽に書いたのが、丹波新聞に取りあげて下さり、多くの方から手紙や電話を頂き、少なからず戸惑っている。全ての方を紹介して、感謝したいが不可能である。

唯、柏陵同窓会の会場で遠慮がちに話しかけて頂いた余田功氏は、当時叔父の近所に住んでおられた方で、その頃の様子を伝える貴重な内容の手紙であり、一部を終わりに載せさせて頂く。なお、文中「村の者の目云々」のお心遣いは表彰状まで頂いていることを記して置く。余田氏は現在、

現在は東京で、建築技術士として㈱日匠設計を経営

されているようだが、このような方一人だけでも居て下さったことに、叔父も喜んでいることと思う。

多くの人々に読んで頂き、中には「一気に拝読」という手紙もある。私の妻は「あんな下手な文章、一気に読めるわけがない」と申しますが、世の中には、自分に優しく、他人に厳しい人”だけではありません。私のように文章の下手な人も是非書いてみて欲しい。

◆余田氏の手紙から抜粋

「高校時代授業を受け持っていたことはありませんでした。しかし私が戦争遺児であったことや、能力もないのに少しは志しのある村内の若者として、大槻先生が特別にお気をかけくださっていることは感じておりました。それを私はむしろ疎ましいぐらいに感じていたのは若気の故で、少しは世間を知りようになつてからはたいへん申し訳なく思つておりました。大学を卒業し身支度のために一旦村に戻り、東京へ出てくる前日に先生にご挨拶に伺いました。先生は手を取らんばかりに座敷に招き入れてくださいました。私の旅立ちを大変喜んでくださり、励ま

してくださいました。

先生の御母堂様には、私が社会人になるまで疎開地にそのまま居つかざるを得なかった母が、いろいろお気にかけていただいたと聞いています。私も、先生が巣鴨に収監されているお留守宅には、母の仕事の手伝いとして新聞代の集金にたびたびお伺いしました。まことに静かなお暮らしでした。そしていつも、まだ中学生でしかない私にも実に丁寧なご対応をしてくださいましたことを印象深く覚えています。税吏の土足での蹂躪や私財一切の差押えの事は、拝読して初めて知りました。それにつけても、当時のお留守宅に対する村の者の目は優しかったのだから、静謐なお暮らしぶりを思い出した今、詮無いことながらいささか気になるところです。大槻先生がお亡くなりになったことは風の噂にのみ聞いておりました。御霊前に香を捧げることも致しておりません。御著を拝読し先生のお心ばえを偲ぶことをもつて供養とさせていただきます。」

郡境の峠 **丹波**を撮る

氷上郡は原則的には佐治川、竹田川、篠山川によって隣の郡と結ばれている。
だが、峠を越さないと郡外へ出られない地域もある。
その風景を連載してお伝えする。



青垣町遠阪からみた遠阪峠。この周辺は土地も高いので相対的に低く見える。



かつての但馬国、和田山側から見た遠阪峠 (旧道)。

丹波を撮る

撮影：徳田八郎衛



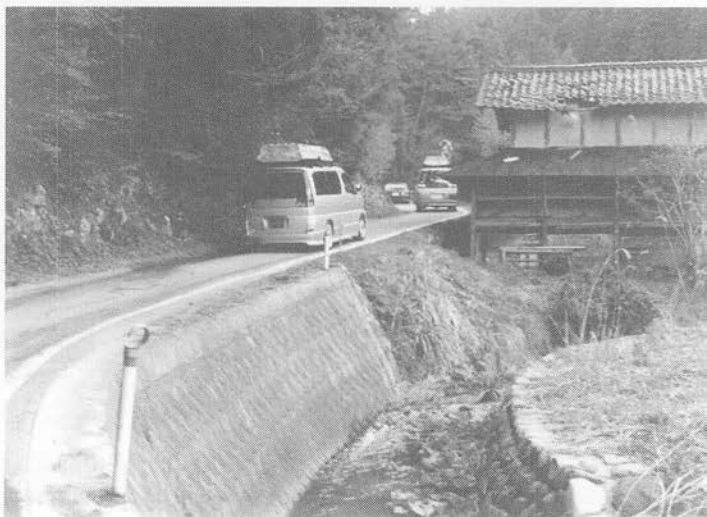
青垣町大名草からみた生野峠（青垣峠）。



地図の記載は従来の生野峠であるが、生野側では「青垣峠」と記されていた。

ヒュー！
これでも国道429号ですか？
（生野町黒川にて）

政治評論家の竹村健一氏も
黒川から生野高校まで20キ
ロの谷間を通ったとか。



まだがんばったりませ!

丹波を撮る



昭和初期に架けられた青垣町西
芦田の「みのくま橋」。

この道を何万もの若人がペダル
を踏んで柏原へ通ったのだ。



遠阪川の千歳橋も昔のまま。(青垣町遠阪にて)

丹波を撮る



オクドさんの煙抜きの屋根（青垣町 西芦田）
右隣の家は大西滝治郎海軍中将の生家（写真右）



青垣町佐治の町中で（背後の建物は青垣町役場）

変わる丹波 変わらぬ丹波

丹波を撮る

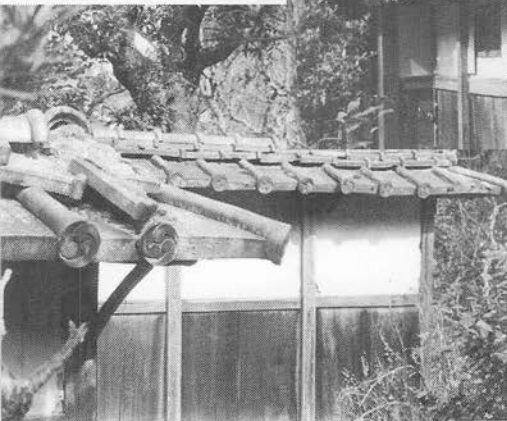


最近は丹波も物騒でっせ

ヤヤ!

車輪もナンバープレート
もない! 夜陰に乗じて?
いえいえ街灯が明るい
おかげで……

(柏原町母坪)



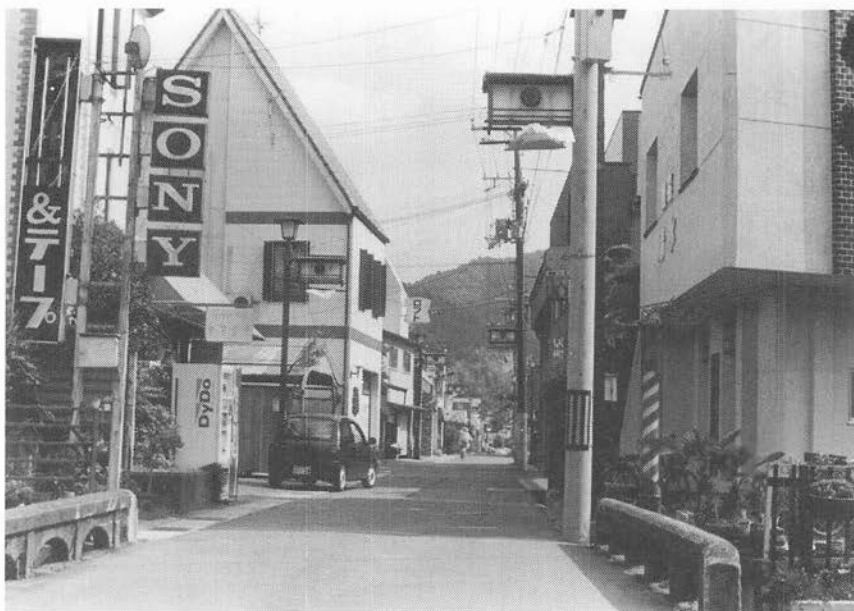
おのれ!

えびす様には手をつけず、大黒様の像だけを
屋根から持ち去る曲者。(柏原町母坪)

丹波を撮る



ようやく柏原駅西側にも有料駐車場ができました。



ここは柏原の石田本通りです。北側の丹波ラヂオも南側の谷書店も健在でっせ。



近況・エッセイ

朝のウォーキング

生田清弘（柏原町）

毎回、海外旅行の思い出などを中心に拙いながらも「山ざる」誌に投稿して来たが、私も齢八十に近づき、今年の中欧旅行で終わりにしようかと思っていた矢先、イラク戦争が始まり、つづいて全く予期しなかったSARS（新型肺炎の重症急性呼吸器症候群）の流行もあって残念ながら延期せざるを得なくなったので、中欧紀行は後日に譲ることにして、今回は話題を転換して「朝のウォーキング」をまとめてみた。



一九九八年八月以降、私は毎朝ウォーキングを続けている。六時頃家を出て妻とともに近くの区立大蔵運動公園まで歩き、園内の広場で自己流の体操をすませて引き返す約六、五〇〇歩（四キロメートル）、所要時間一時間ほどの運動がいつの間にか日課となった。

このウォーキングで一日中の他の歩きを加えると、

ちようど一日一万歩に達する。

当時、ちよつとした病気で二週間ばかりの入院生活を余儀なくされ、退院後も静養中の身であったので、運動不足に加え食事の管理もルーズになっていたと思う。その頃の私の体重は七〇キロを上まわりどう見ても立派な肥満体だったから、一念発起してまずは六五キロを目標に食事と運動の両面から減量に挑戦することにした。主治医のM先生の貴重なアドバイスも、この決心の力強い追い風となった。

食事は市販の書物の中から適当なものを選び、曜日毎のメニュー、レシピや、毎食の組み合わせ方などを参考にした。特に長続きする料理の仕方として、その日のメインになる食事を決め、それに使う材料を活用し、朝・昼・夕の料理構成を工夫してできるだけ飽きが来ないように、食べる人と同じ食材という意識を与えないことに心がけてもらった。

最初の一週間で約一・五キロ減り、一カ月で二キロ、ほぼ三カ月で目標の六キロ減の体重六五キロを達成することができた。この間、一週間毎に体重と体脂肪率の変化を記録した。

顧みると、三カ月までは極めて順調で、むしろ驚くほど予想より簡単に目標値に達することができた。これも食事に気を配ってくれた妻や娘の裏方や、まわりの人々の協力のお陰と感謝している。

ところが問題は次のステップで、少しでも油断すると直ぐにリバウンドしてなかなか安定しないものだということを身をもって痛感させられた。六五キロを境に行ったり戻ったりを繰り返し四カ月にして漸く安定域に入ったようだった。一応、成果に満足し嬉しかったが、更に六五キロを下まわるような次なる目標は敢えて設定せず、この状態が無理をせず自然に持続できるように楽しみながらの食事と歩きを続けている。

最近孫達と一緒に食事をすることも多く、老人の別メニューは守り難い場合があったり、ついお酒を飲み勝ちであったり、その結果、体重オーバーになることもあるが、日々の体重の状況はちよつと歩けば今日は体が軽いか重いかかわかり、以前よりはかなりウェイト・コントロールのこつみtainなものが会得できたような気がする。

ウォーキングの目的地に公園を選んだわけはいくつ

もあるが、沢山の大きな樹木に囲まれた雰囲気は素晴らしい、空気が澄んで綺麗なことや、健康のための森林浴効果を挙げることができると思つたから。

森林浴といっても、公園の樹林は自然林に比べると敷地に限度がありせまい範囲に止まり、大袈裟という程でないかも知れないが、本によると「樹木の分泌するフィトンチッドという揮発性の物質は人体の健康によいとされ、また樹木の香気成分であるテルペンは人の神経、とくに自律神経に作用して精神の安定をもたらすといわれ、森林の中を歩く運動効果と相俟つて健康法として優れている」(電子ブック・マイペディア)とあり、都会人にはお勧めの場所ではないかと思う。

森林浴効果をねらうには樹木の分泌がより活発になる午後の方がよいともいわれるが、私達が朝のウォーキングを選んだのは、一日の途中で出かけると生活の流れが中断される形となり、その前後のことも含めて都合が悪いことが多いから。

ただ、冬季の早朝はとくに冷え込みが厳しく、年齢的にも避けた方がよいと思うので時間をずらすことも多い。

○……………○

毎日歩いていると朝の街の様子がよくわかる。私達が公園に向う時間帯は仕事に出かける人々が次第に増えてくる頃だ。工事現場に向うのか小型トラックに建材等を積み込んだ車をよく見かけるのもこの頃。ウォーキングの帰り道では通学生によく出会う。小・中学生は徒歩ばかりだが、高校生になると自転車通学が多く、近くに女子高校があるのか制服姿の通学生に行き交う。一人ずつの自転車通学やいつも同じ友達同士が自転車を二台、三台と連ねてお喋りしながら通り過ぎて行く。

いつも同じ時間に通ると後から駆けて来て、「お早うございます」と挨拶し一緒について来て、いろんな話をしてくれる中学生もいる。聞けば近くの団地に住んでいて、上層階から眺めていると、私達の姿が見えるので走って来るのだそうだ。私達の住いと同じ方向に学校があり、分かれ道に来ると、「さようなら、バイバイ」と言って別れる。話していて大変楽しい子なので姿を見せない日など、「今日はどうしたのかな」と気になることもある。

この中学生は高校に進学したのか春からは見かけな

なくなった。女子高生もここ一、二年のうちにメンバーがすっかり入れ替わってしまったことに気付いた。

公園に入る手前に大きな住宅団地がある。私達はこの団地内の道路を通るので棟別に設けられた花壇の草木が色とりどりの花を咲かせ季節の変化を教えてくれる。思わず立ち止まって「この花は何というの」、「あの大きな木の花は何かしら」などと話しながら通るのも楽しい。時には田舎のどこそこに咲いている花を連想しながら。

○……………○

公園内はペットも一緒に入れるので朝は犬連れの人が多い。犬仲間らしい人々の集まりがあちこちに見られ、犬の種類も多く子牛かと思う程の大きなものからテリアのような小犬までいて、犬同士も毎日出会っているのによく馴染んでおり親友といった感じ。互いにじゃれたり、吠えたり低い目線で犬にはどんな景色が映り、何を話し合っているのだろうか。

老犬は歩き疲れるのか主人に引張られて嫌々ついて行くが、時折り足を踏んばって駄々をこねる仕草をして飼い主を困らせている。プール近くの水場では水浴

びをしている犬も見かけ、水から出ると思いきり体を震わせて水をはね飛ばす。私達が体操をする広場では投げられたボールを追い駆ける犬がいる。そのスピードの速いこと、ボールをくわえて誇らしげに主人のもとに戻る。犬も兄弟、姉妹、親子など様々のように映る。

隣の砧公園では一部に「ペットお断り」というところもあるようだが、この運動公園内では犬を連れの人々はそれぞれ小さなビニール袋と犬の排泄物を処理するシヨベルを持ち歩いて、公園内のマナーは比較的よく守られているようだが、たまには地面に転がっていることもある。ふとイギリスのことを思い出していた。

街外れの林の中の散歩道を通っていた時のことだが、道端のところどころに郵便ポスト風のものがあるのに気付き、近寄ってみると、それらはペットの糞を入れる容器だった。これがあると家に持ち帰らずその場で始末できるので大助かり、行き届いた配慮に感心したものだ。

○……………○

公園の春は桜が見事である。樹齢を重ねた大木が沢

山あり、桜の種類も数種あって、それぞれの開花時期の違いから比較的長い間花見ができ人も多い。また砧公園の桜は大木揃いで大きな枝が地面に届く程垂れ下がり見応えのある景観を呈する。

公園では季節に応じて各種のイベントが行われる。

大蔵運動公園（ウォーキングの環境）
① 体育館——公園の中心部に位置する。



② 花壇——緑に囲まれたカラフルな円形花壇

運動公園の名に相応しく各種のスポーツ施設が整っている。立派な公認陸上競技場ではスポーツシーズンになると、世田谷区を中心とした中・高校生の競技大会やサッカーなどの試合も行われ、ナイトゲームも可能な野球場では社会人の練習や試合も行われる。また体育館や温水プールもあり、大人や子供もスポーツを楽しんでいる。

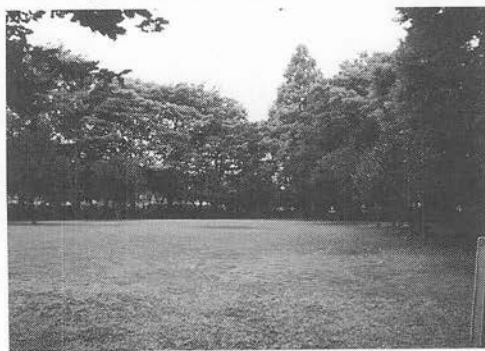
テニスコートは十二面あり、毎日のように個人やグループで利用している。公園内には花壇や噴水も設けられ、運動広場や体育館前の広場周辺ではイベントの時、沢山露店が並び親子連れで結構賑わっており、中にはゲームに興じる姿も見られ微笑ましい。バザーのある時は店を見て歩くだけでも楽しいので、ウォーキングの時間を調整して出かけ、店で弁当を買って憩いのひとときを過ごすこともある。

イベントの翌日は公園内に設けられたごみ入れに入りきれないごみの山ができ、鳥の絶好の標的ともなり、ごみが散乱して目をそむけるような状況があちこちで見られたが、最近になってごみ入れが全廃され、ごみを捨てるどころがなくなった。



③ 樹林とバラ園——両側を砧公園に通じる道と林に囲まれたバラ園に

はじめは、随分思いきったことをしたものだと思いつの後の様子を注目していたが、暫くは袋に入れたごみが地面に放置されていたが、この頃ではごみを見ない。面白いもので大胆に入れものをなくしてしまえば人々はそれぞれ自分のごみを持ち帰るなど個々に始末



④ 自由広場——林と桜に囲まれた広場。毎朝、この広場で体操する。

するようだ。やはり人には良心があるのだ。

○……………○

話が公園のことになってしまった。元に戻そう。毎日歩いているとよく出会う人がいる。お互いに交わす朝の挨拶は気持ちがいい。長く続けていると声を掛けあう人々も次第に増えてくる。

ウォーキング後は気分も大変爽やかで、夏だと発汗作用が活発で本当に運動したという実感を伴う。シャワーを浴び着換えるとまた格別。習慣になると歩かなかった日は、何となく物足りないというか生活のリズムまでが狂った気がする。

しかし、体のコンディションはいつもいいとは限らず、天気も晴れた日ばかりでなく、曇った日も、雨の日もあり、冬には雪も降る。地面のすべり易い時は特に注意が肝心。年とって転ぶことは禁物。自分の年齢も考慮しながらあまり無理をせず、自分の体力に応じて長続きさせることが大切。要は自分のための食事であり、運動であることを銘記すべきである。

(二〇〇三年)

金婚式を迎える年に：

井田悦子（市島町）

江戸ッ子の主人と結婚して東京に住み、その間、千葉の流山に移り住み十五年、丹波の親元を離れて丁度五十年、お陰様で二人とも元気で金婚式を迎えることが出来ました。

流山市からお祝いをしていただき、改めて五十年の早さを感じます。その間、家族も大した病気もせず無事に過ごさせてもらいました。長男夫婦と一緒に暮らしていますが、孫達も大きくなり多少暇が出来ましたので、七十歳を過ぎて主人は千葉の生涯大学、私は市のゆうゆう大学へ通っています。

六十歳以上の方ばかりなので人生経験豊富、いろいろ教えていただくことが多いです。松戸の親戚へ古典文学を習いに行っています。もう十年以上通っていますが、忘れることの名人ゆえ、あまり身につかないようです。

今は『古事記』を習っています。コーラスをやったり少しずつボケ予防のため頑張りたいと思っています。その反面、去年の十月の末に外ですべて転んで右手首骨折、やはり年かなと情けない気持ちでした。

去年の四月、市島の実家かみだが上田の方に家を新築して、その際先祖の合同法要をすることになり、丹波へ帰りましたが、やはり緑の山々を見て、なつかしく戻ることのない五十年前の祖母、父母の想い出が浮かび、オリンピック並みに四年に一度位しか帰郷しなかったことを詫び、一年に一度は墓参りに帰りたいと思っています。交通の便も良くなったようです。東京生まれで田舎のない主人も丹波へ帰るのを楽しみにしています。毎日が平凡ですが、近くの農家の畑を借りて、野菜作りをしています。キュウリ、ナス、トマト、我が家で取れる野菜の味は又格別です。体の続く限りやっていきたいと思いますが、夏の草取りはたいへんです。一年に一度の郷友会で皆様にお会い出来るのが楽しみです。段々と年を重ねます。無理をしないように頑張りたいと思います。

姉妹旅行

木呂子 惠美子（春日町）

この春、七年ぶりの四姉妹旅行をした。姉が氷上町



天の橋立で（左から姉、私、妹、その下の妹）

市辺から、私と妹二人が東京から京都駅で合流し、建仁寺で父母の墓参りをした後、城崎に一泊、城崎まで来てくれた義兄の車で、天の橋立、伊根を回り、姉の所で一泊という関東組の私達には二泊三日の旅だ。

私を除いて皆忙しい日々なので、四人揃うのは仲々むずかしい。城崎温泉は、前から行きたい所だったが風情のある街道を眺めるのもそこで、食事、温泉の後はおしゃべりに夢中、私は途中から一人でぐっすり寝込んでしまう。（昨年五月、白昼空巢に入られて以来、不安神経症のようになっていたので、皆の中で安心して寝たらしい。）

NHK朝の連続ドラマ「ええによぼ」の舞台になった伊根では遊覧船で湾内を回ったが、海辺から各々の家の中に舟が入っていく舟屋が面白く、美しいと感じた。また丹波に入ってからか、白毫寺の藤棚が見事だった。たつぷりと豊かな花房が、下で写す人の顔を優しくする。

私達は出生地が各々異なる。姉六十七歳は満州、私六十五歳東京、上の妹五十六歳京都、一番下五十一歳が春日部産である。この春日部診療所跡にも、連れて行ってもらった。私は十八歳で上京し、その二年後には父も東京に来たので、妹達は小五と入学前までの住み家だが、私にとっては結婚するまでの一番長く一つの所にいた場所だ。思い出はたくさんある。今でも覚え

ている校歌「ああ春日部の美し郷 人勤勉に物豊か
文化は日毎進めども 平和は太古さながらに」

「美代ちゃあん、遊ばかあーい」近くのつやちゃん
可愛い声で来て、陽の当たる縁側で、妹と二人お砂糖
を混ぜたハッタイ粉を食べている。甘い香がして、私
までマネしてしまう。

或る日、竜巻みないな風が吹き、入口の病院側と裏
の雨戸が全部バタバタと倒れ、その延長で裏山の太木
が根こそぎ倒れた日があった。前の瓦屋、竹内さんの
おばさんから、早速おにぎりが届く。この方は、その
後、黒井に下宿して先生をしていた姉の元に、東京か
ら私が訪れた時、一緒に挨拶に行ったら、次の日忙し
い中を「鯖寿司」を作って自転車飛ばして黒井まで
届けて下さった。

私と同年の美智子ちゃんと兄三人と妹の五人兄妹。
年一度お正月に若者同士集まってトランプやゲームで
夜遅くまで盛り上がる楽しい日があった。裏庭はコス
モスが一面に咲き、裏山に藤や赤つつじが自生してい
た。山から家の横を通る細い流れに、芹が密生してい
た。

その後、診療所建物は焼けてしまったとのこと。
姉は十年前までの長い教員生活の中で、教え子が多
勢いる。あちこちでいろんな人と交す丹波弁が温かく
聞こえる。姉より十六歳下の春日部産の妹も、今年は
三人の娘を全部社会に送り出した。仲々良い子育てを
したと思う。

昔は家族が多くて大変な時代もあったが、亭主が亡
くなつて十五年、妹たちにもずいぶん助けられてきた。
今は父母に感謝している。

我が家の一人息子は、シンガポールで五年が過ぎよ
うとしている。今年の一月は、出張先のニューヨーク
から「お誕生日おめでとう」と電話があった。夜の空
港で「シンガポールに帰ってからでは間に合わないか
ら」とのこと。

SARS、テロ等心配の種はつきないし、日本にい
る時でも例のオームの地下鉄事件では出勤時間が一五
分遅れて難を免れたらしい。

せめて世界を飛び回って仕事をしている人達が、心
おきなく暮らせる世の中であつてほしいと祈るだけし
かできないが……。

草の根文化交流を目指して

— N P O 法人アジアの新しい風 —

上 高 子 (氷上町)

◆設立の目的

イラク戦争の始まる少し前にアメリカとイラクの高校生たちがテレビ討論をした番組を、戦後になってB S放送で見たことがあります。イラク側は全員戦争反対、アメリカは半々でした。イラク側の生徒たちは英語がうまく、マナーも優れていて、一時間ほどの意見交換の中で、必死にアメリカの高校生に不戦を訴える姿が印象的でした。

戦後の取材で明らかになったことは、アメリカ側の戦争賛成派の生徒が、イラクのその高校が爆撃を受け数人が消息不明になったことを知って衝撃を受け、戦争反対に変わっていったこと。これは、イラク人、アメリカ人というふうに一括りにするのと、具体的な個人として認識することとの違いから起きること、これこそ草の根交流の目的とするところ、紛争解決に

「戦争」という手段を回避するための第一歩なのです。

アジアの新しい風は、日本語教育を通してこの交流を行う、というところに特徴があります。日本語教師をアジアの大学の日本語学部・学科へ派遣します。教師は日本語上達の技術的な教育にも増して、日本語でのコミュニケーションを通し、日本人とその国の人々との相互理解を促進するよう努力します。実際そのような素晴らしい教師を見てきました。

ある中国人の学生は、「先生を通して日本人に対して持っていた悪い先入観が覆された」とお別れの作文に書きました。その教師は定年退職後、日本人に対する悪評を正したいと意気込んで日本語ボランティアに赴きましたが、帰国するに当たって作文の束を持ち帰り、「私の宝物」と言って、学生たちとの国を超えた個人として交流を懐かしんでいます。

また学生たちとN P Oの会員がメル友(電子メールを使ったペンフレンド)になり、日本語学習の支援をするという仕組みを作りました。メル友会員は日本語の添削もしますが、手に負えないときは現職日本語教師がサポートします。「日本語を学んでくれて有難う」

という気持ちを込めて学生たちを支援し、日本とアジアの関係をよくしていきたいと考えています。

◆ NPO 設立の経緯

私たちの NPO 設立に欠かせない存在は、日本 NPO 学会初代会長の林雄二郎先生です。理事をなさって



「NPO法人アジアの新しい風」の創立総会で

いた育英財団に私が勤務していた関係で、ことあるごとに先生から「社会貢献」の重要性を聞かされてきました。「利己のために生きるだけで、本当の生きがいは利他にある」

と。自分にどんな社会貢献ができるかと問い続けて、これまでのキャリアの延長線上にある「日本語教育と多文化共生の実践」というところに行き着きました。そこで、以前日本語教師をしていた学校で同僚だった仲間へ声をかけ、発起人として賛同を得たので、NPO 法人の設立申請を行いました。

多文化共生とは、互いに違いを認め合って平和に共存するという意味です。文化に優劣をつける縦の関係ではなく、横の関係です。先生にビジョンを話して賛同していただき、パンフレットへの揮毫をはじめ、総会での講話など、惜しみなく協力をいただきました。

一昔前、「名もなく貧しく美しく」という映画がありました。私が、私のように社会的地位がなく、設立資金もゼロ、外貌は及ばずも志さえ美しければ、NPO 法人の主宰ができる良い世の中になりました。アイデアとそれを応援する仲間さえあれば、NPO は成功するということなのです。

八月末現在会員は七十七名。期待を裏切らないよう、真剣に取り組む決意です。

◆なぜアジアか

私を含む戦後世代は、過去をすべて否定した教育の中で育ちました。占領軍がもたらした民主主義や男女同権などすばらしいものはたくさんありましたが、「脱亜入欧」そのものの生き方を是としてきたため、アジア諸国との関係をないがしろにしてしまった上に、日本古来の文化的なよいものを失ってしまいました。

ここ数年の「文明の衝突」と称される世界構図を見ると、アジア的な「非暴力、寛容、慈悲」などの価値をもう一度見直す必要があるのではないか、という思いに至っています。もちろん古いアジアに戻るものではありません。アジアのよいもの、残すべきもの、復活すべきもの、われわれはそれを探していきます。アジアの日本語学習者と交流することによって、アジアの価値を再発見していくつもりです。

◆今後の活動

今年、北京第二外国語学院（以下二外）へひとりの教師を派遣しました。二外は、日本語を教えている中国の大学百二十校の中で一、二を争う日本語教育のレ

ベルをもち、先般の六か国協議で活躍の現外務次官・王毅氏を輩出しています。私も何回か訪問し、授業を参観したことがあります。中国人教師も全部日本語で教え、生徒の学習態度も真剣です。

来年は、北京大学と優を競う清華大学へも、第二次日本人教師を派遣予定です。日本語学科の歴史が浅く二外ほどの実績はありませんが、今後人材を輩出すること間違いありません。学校が選抜した優秀な学生とメル友になり、異文化コミュニケーションによる新しい発見や、日本語を教えるという楽しみを味わってもらいたいと願っています。

来年は学生たちとの交流や現地の日本語教育視察のため、これら大学を訪問する旅行を計画しています。当面中国はこの二校にとどめ、次の目標はタイ国を考えています。

◆興味がある方は下記までご連絡ください。

電話・ファックス ☎ 03・5426・6714

E-MAIL jimukyoku@npo-asia.org

ホームページ <http://www.npo-asia.org>

(NPO法人アジアの新しい風・理事代表・上高子)

今年の花見

木村 つた江（市島町）

昨日まで降っていた雨もあがり、今朝は雲一つない晴天です。私は桜上水に住んでいる姪を誘って、近くの都立神代植物公園に出かけました。つつじヶ丘駅からバスで十数分で植物公園に着き、時計を見ると十一時前でした。あまりの人手に驚きながら、いつものコースを通り、桜のトンネルを抜け、芝生に腰をおろし、姪が言いました。

「もう散りかけているかと思っただけど、大丈夫だったのね。気温が低かったせいかしら、今日も少し肌寒いですものね」

二人はゆっくり園内を歩いて、しだれ桜の下で写真をとったりしながら、一時間程、花見を楽しんで帰りがけました。来た時はさ程でもなかったメイン通路が、行き交う人々の肩がふれ合う程の混雑ぶりに二度吃驚しました。

後で考えてみると、当日は金曜日で、久し振りの晴天です。そして翌日は朝から本降りの雨、たった一日だけ、天が私たちに授けてくれた最高の花見日和だったのです。人の気持ちは皆同じなんだなーと私は納得した花見でした。

◆伊豆高原の桜

四月七日、晴れ。この日は伊東のGホテルに前もって一泊の予約がしてあったので、私は若い友人と二人で出かけました。途中、少し足を延ばして伊豆高原の桜見物をすることにしました。伊豆高原駅を出ると、いつもの閑静な駅前とは異なり、宴の跡のような乱雑さに驚き、そこにいた若者に尋ねたところ、

「昨日までは高原の花見客でごった返していたんです。今日はその後片づけをしているんです」

私たちはそこを離れ、百メートル程歩いてお目当ての桜並木の下にきました。この通りの両側には、満開のそめいよしののトンネルが続いていて、そこからなだらかな上り坂になっていました。坂の途中まで元気よく歩いてきた筈の私と、友人の距離が大分離れてい

るのです。私は息が苦しくなってきた立ち止まってしまいました。暫くして振り返った友人は待っていてくれました。

この時、私はつくづく老いを感じたものです。それから二人は坂上の茶店で軽い昼食をとり、改めて空気の澄んだ高原の桜の下で、心ゆくまで楽しい会話を交わしたのです。

帰りは市の循環バスで駅に着き、伊豆急で伊東のGホテルに着いたのは午後四時前でした。「夕食前に一風呂浴びましょう」と、大浴場に入りました。大浴場の中は大小の自然石で造られていて、中央に本格的な能舞台が設えてありました。私は若い頃、謡曲を少しばかり囁ったことがありましたので、この取り合わせに奇異な感じがありました。このホテルのオーナーのアイデアかもしれません……。

時局柄でしょうか、この日の客はまばらのようでした。おかげで私たちの夕食は部屋に運んでくれましたので、のんびり花見の後の余韻を楽しむことができました。

◆ふる里鐘ヶ坂の桜

伊豆高原での花見が終わって数日後、柏原町の妹から電話が入り、十四日から一週間は自分の都合もいし、鐘ヶ坂の桜も丁度満開らしいから、ゆっくりするように来て下さい、とのことで、私は早速出かけることにしました。妹宅に着いた翌日は、絶好の花見日和でした。二人は妹宅からタクシーに乗り、二十分足らずで鐘ヶ坂に着きました。ウイークデーのせいか閑散としていて、花見客らしき人はちら、ほらでした。私は何十年振りかで、ふる里の桜はもとより、山の空気の意味しさに感激して、両手をいっぱい拡げて何度も深呼吸をしました。それから二人はベンチに腰をかけ、弁当を揚げました。と爽やかな風に乗って桜の花びらが二つ、三つ弁当の上に散ってきました。二人は思わず顔を見合わせ微笑み交わしました。そして妹は次のような話をしてくれました。

江戸末期に、安藤広重が鐘ヶ坂に来て、この桜の景色を描いたそうです。この頃から鐘ヶ坂の桜は有名だったらしく、昭和の初めの頃には茶店も出て、阪神方面からの花見客で賑わっていたようです。ここの桜は山



鐘ヶ坂の桜

裾から頂上に向かって、すり鉢型に植えられていて下から見上げて、上から見下しても風情があったと思われまます。そしてその景観は百年以上経っても変わらず続いていたのでしょうか。しかし三方を山に囲まれた険しい斜面は交通の難所でもあったようです。

明治になって、山の中腹に煉瓦造りのトンネルが完成しました。煉瓦作りとしては日本で最初のトンネルでした。しかし年月を経て昭和の中頃に二つ目のトンネルを造らねばならなくなり、数年後完成しました。ところが近年になって時どき崩落が起こり、三つ目のトンネルを最近になって造りましたが、まだ共用は少し先になるとのことでした。

三つ目のトンネル腹に山笑う（妹の句です）

私には鐘ヶ坂に特別の思い出があるのです。

七十数年前、私が小学校六年の時のことです。春の遠足があり、行先は鐘ヶ坂の桜見物でした。六年生全員四十数名が、若い先生（男女）二人に引率されて行きました。学校から鐘ヶ坂までは往復十里（四十キロ）の道程だということを後で聞いてびっくりしたもので

す。往きは皆元気がいいで、桜の下で皆それぞれ家から持ってきた弁当を揚げ、楽しく過ごしました。

そして、すり鉢のような山裾から頂上に向かって、満開の桜を見ながら、山の中腹を経て、町道や県道を黙々と歩いて帰途に着きました。もう後二キロ程まで帰った時に全員が、足が痛くて歩けないとか、疲れたとか言って先生を困らせました。そこは春日町と旧鴨庄村の境で、柏野かしわのという広い宅地になっています。柏野では山東北区聯合運動会が開かれた所です。皆は十分間の休憩時間に草の上に寝転がって一息つきました。もう太陽は西の空に沈みかけていました。先生の号令で仕方なく立ち上がり、よたよたと歩き始めました。岩戸部落の生徒は、私を含めて三人で、一人はT君でした。岩戸部落にさしかかる手前に墓地のすぐそばを通らねば他に道のない山裾に沿った小さな村道があります。三人は痛い足をさすりながら、その墓の傍らにさしかかりました。すると、T君が墓のすぐ横に薪の束が積んであるのを見つけ、杖になりそうなのを三本引抜いてきて言いました。

「さあ、もう一息だ。これをついて早う帰らんと暗う

なってしまうで」

私はT君は小柄で大人しい女の子のようだと常に思っていたのですが、この時ばかりはとでも頼もしい男子だと思つたものです。

私は兄たちがよく言っていたのを思い出しました。「松尾の墓に青い灯が燃えとつたそう。それに狸が砂をかけるらしいぞ」

私はそれを思いだして体中がぞつとしたものでした。三人はかけ足で墓の前を通り過ぎ、松尾の山裾を曲がると百米程先に我が家が見えました。母が心配して門に立って待っていてくれました。私は半泣きになって母に縋りつきました。二人の友達を、兄が家まで送ってあげようと言つたのをT君が断りました。

「僕がちよつとだけ遠回りして、家まで送つたげるさかい大丈夫やで」あたりには、夕闇が迫っていました。

かくして私の今年の花見は、東京、伊豆高原、丹波と三ヶ処を、それぞれの気持ちも三様に桜を愛でることができました。これも健康なればこそと、改めて感謝の気持ちで嘯みしめた次第です。

私は介護老人保健施設「シルバークエア敬愛」というところに勤務しております。

介護老人保健施設は、介護保険制度が始まる前には、老人保健施設と呼ばれていました。

老人保健施設は、特別養護老人ホーム等のホーム的な要素と病院医院で行われている医療的要素を併せ持ち、なおかつ特別養護老人ホーム等のホームと家庭との中間、病院医院と家庭との中間に位置する施設としての役割を担っていました。

私の職場

家庭復帰をめざし介護支援

介護老人保健施設「シルバークエア敬愛」

本城 英明（氷上町）

ゆえに当初は七〇歳以上で（六五歳から六九歳までの人は老人医療受給者証を持っている人）病気や障害の状態が安定しており、病院や医院での治療や入院の必要はないけれども、寝たきり、もしくはそれに準ずる状態で看護や介護が必要な方を対象として、リハビリ、食事、入浴、レクリエーションといったケアを総合的に提供して在宅への復帰を目指す施設でした。

途中、老人性痴呆症の方が増えて来ましたので、入所対象項目に老人

性痴呆症（アルツハイマー型痴呆を含む）のある方も加わるようになりました。

平成九年二月一七日、介護保険法が成立して、老人保健施設は介護保健施設のひとつとして、介護老人保健施設として位置づけられました。

介護老人保険施設への入所条件は、介護保険が導入されてからは、利用希望の方が各市町村へ要介護、要支援認定申請を行い、要介護1から要介護5までの（数字が増えるほど介護量が多くなる）認定を受けた方が入所利用対象者となることになりました。

利用希望者が入所されますと、施設サービス計画書が作成され、それに基づいて介護・看護・リハビリなどが行なわれていきます。

この施設サービス計画書は、医師、看護職、介護職、理学（作業）療法士、栄養士、支援相談員、介護支援専門員等が集まり、入所者の方、一

人ひとりについて、それぞれの専門職の立場から意見を出し合い、チームワークの中から作成されていきます。

施設でのリハビリは少しでも残された機能を活かして、日常生活動作が幅広くなるように行われます。

またレクリエーションは、端午の節句や七夕、それにクリスマス会などの季節行事の他にも、地元の幼稚園や中学校との交流会、ボランティアの参加による演奏会や舞踊会などがあります。

また、ボランティアの指導による



「シルバーケア敬愛」のスタッフ一同（前列右端が筆者）

華道や書道には多くの入所者の方が参加されます。時には野外に出かけて買い物や食事会それに文化関係の会館見学も行います。

このように心身ともにリフレッシュして在宅復帰を目指します。平均して三〜六か月間を利用する施設サービスその他に、短期間を施設で過ごすショートステイ、日帰りで入所部門と同様のサービスを利用することの出来るデイケア（この場合には要支援の認定を受けた方も利用できます）も当施設では行っています。

場所は、まだ武蔵野の面影が残る埼玉越谷市です。入所定員数は九八名。デイケアは一日当り八〇名が定員となっています。



旅の エッセイ

キューバを訪問して

酒井重男（柏原町）

平成十三年一月末から三ヶ月間、わが国のキューバ共和国への開発援助の一環として、国際協力事業団（JICA）の要請により、ハバナ市に滞在しキューバ日本大使館のご援助のもと、「ハバナ湾浄化プロジェクト」の技術指導を行なった。

そこで、以下にキューバの概要、国情、経済、指導内容などについて述べる。

◆キューバの気候

キューバはカリブ海の東西に延びる細長い島で、面積は日本の約半分である。気候は乾季と雨季に分かれ、乾季は十月から四月頃までであるが、平成十三年は特に気温が低い日が多く、日中三〇℃位でも日陰に入れば風があり涼しく、非常に過ごし易かった。

◆キューバの独立と政治

キューバは一九五九年、カストロとチェ・ゲバラが率いる革命軍がバチスタ政権を打倒し、いわゆるキューバ革命によりカストロ政権が成立した。それ以来、ソ連邦が崩壊するまで社会主義国家の道を歩んできた。

政治はカストロ政権が民主化を唱えるとともに、文盲一掃、医療および教育の無料化、土地の国有化などを進め、社会主義国としての多くの問題に直面しながらも、独自のスタイルを守り続けている。また、この国は全く人種差別がなく男女平等であるので、国、民間を問わず上層部の管理者には女性が非常に多い。

◆キューバの経済と政治

ソ連邦崩壊後は一時食べるものにも窮するほど経済困難に陥った。収入源としては砂糖産業が低下した現在、コーヒー、葉巻、ニッケルなどがあるだけで、観光に頼るしかないため、国はドル獲得のための観光産業に力を注ぎ、最近では年間一八〇万人の観光客が訪れる。観光客は主にカナダやスペイン、ドイツ、フランスなどのヨーロッパ人が主で、日本人は年間約一万

人が訪れたと言われている。

ハバナ市は人口約二〇〇万人の大都市であるが、貧富の差が大きく経済的に恵まれているのは二、三割といわれ、給料は一〇―数一〇ドルと低く、給料だけでは生活が苦しいようである。しかし、革命以後一九八〇年には一二万五〇〇〇人のキューバ難民発生のマリエル事件があり、その後多くの人達がアメリカなどに出国し、現在約一五〇万人が海外に住んでいるといわれる。その中、経済的に成功した人達がドルをキューバに送金してきているようで、年間約四〇〇億円といわれる。

ハバナ市には所々にドルショップがあるが、物価は肉類、果物類以外ほとんど輸入食品であるためかなり高く、またレストランなどでもそんなに安くはないが、多くのキューバ人達が来ており、経済的に理解できない不思議な国である。

キューバ人は非常に陽気な国民性で親切であり、また治安も非常に安定しており、至る所からサルサ、マリンボ、メレンゲなどのラテン音楽が聞こえてくる日々で、安心して生活することができる。



指導した研究所の指導者（左から2人目が筆者）

◆キューバとわが国との関係

歴史を遡ると一六一三年、仙台藩主伊達政宗は家臣の支倉六右衛門長経（通称、常長）をメキシコ経由でスペインおよびローマへ派遣した。その目的はメキシコの直接通商交渉を名目に、スペインとの同盟締結であった。

一行は日本人とスペイン人を合わせて一八〇人余りで「慶長遣欧使節」の名称で知られている。使節団は七年余りの歳月を費やし交渉にあたったが、最終的には日本の徳川幕府の家康、秀忠の時代で、キリスト教弾圧の影響で使命を果たすことができなかった。

キューバとの関係は、このスペインからの帰国の途中に立ち寄ったことに始まり、その後浅からぬ交渉があったようで、特に仙台市とは関係が深いようである。私が訪問している時も仙台の育英学園関係のご努力により、ハバナ湾に面した景色の良いところに、日本庭園（六〇m×一六m）が完成した。そのほか植物公園には立派な日本庭園が、ソ連崩壊以前の経済が豊かであった時に造られている。

◆ハバナ湾の汚染

ハバナ湾はカリブ海の外洋に面した全長約一・五km、幅約〇・二kmの船舶航行水路がある港湾で、平均水深九mである。この湾には南部に位置するルヤノ川及びマルチンプレス川から平均約一・五m³/日の淡水が流入するが、水量が少なく典型的な閉鎖状態海域となっている。したがって、二つの川から流入してくるほとんど未処理の工場排水や下水の沈殿汚泥物質が湾に堆積している。さらに、湾岸の精油所、発電所、都市ガ

ス製造工場、水産物加工工場、油脂工場などから油を含んだ排水が排出されてきており、湾自身が最終沈殿池の役割を呈している。

そこで、微生物を使った油ヘッドロの分解を、十年から二十年かけてもよいから行いたいという国の政策を援助するため、バイオテクノロジーを使った油ヘッドロの分解の手法を、環境・科学技術省、湾岸環境管理センター、海洋研究所、Ceinpet（企業）などに対して指導を行ってきた。

サハラ砂漠で会った男

澤 田 哲 生（市島町）

最後に砂漠を旅してから、もう十三年が経とうとしている。砂漠とはサハラ砂漠である。

サハラ砂漠には二度行った。一度目は、モロッコのワルザザードからデューン（大砂丘）を見に行った。

そのスケールと美しさに圧倒されたたちまち虜になった。その時、案内してくれた男は、ワルザザードの町中で私に「砂漠に行くんだろ。だったらガイドなしでは行けないよ」と言った。

振り向くと二郎さん（坂上二郎）に瓜二つの男がそこに立っていた。彼を車に招き入れて、さらに奥地へと向かった。やがて検問があることを知った。モロッコの二郎さんは正直な男だった。

そして、二度目はアルジェから南下してサハラに入っ

た。この二度目のサハラは私の人生を決定づけた。砂漠には忘れたい出会いがある。

☆

十二月、クリスマス休暇だった。南ドイツから車を駆って、フェリーで地中海をわたり三日目にアルジェにたどり着いた。そこからひたすら南下し、砂漠の街をいくつか通り過ぎつつ、誰もいない砂漠のど真ん中でキャンプもした。

その夜、星の降る夜とはまさにこのことかと思うほど、一八〇度の半球から星の光線が身体を射抜いた。丹波の夜空もこれには敵わない。とにかく、遮るものがなにもない一八〇度の漆黒の天球から、ぐるっと三六〇度見渡す限り星が降って来る。その時、わたしは後に妻になる鈴木順と旅していた。

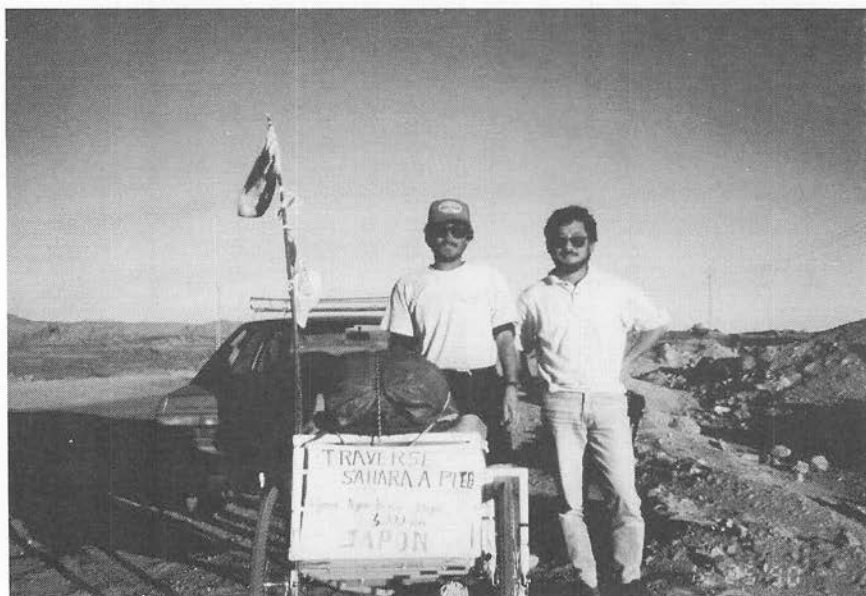
☆

砂漠にはいつて三日目の夕刻、ピンクがかかった薄紫の夕焼けに目を奪われながら車を走らせていたときだった。前方に妙な影が見えたような気がした。すぐさま、それは、リヤカーを引き異様に早足で車道を歩く男だと判った。が、即座に私の頭は混乱した。なぜ、砂漠

にリヤカー引きがいるのだ。

そもそも、その近辺に街や村はなかった。それに大体、リヤカーがやけに小さい。さらに近寄り、やがて追い抜きざまに、もっと妙なものが目に入ってきた。なんと『日の丸』がリヤカーに突き立っていたのだ。日の丸は明らかに随分ヨレていた。そして、サハラ砂漠縦断リヤカー五〇〇〇キロとはつきり書いてある看板が読みとれた。その時、「ちよっと、とめてえー」と順が叫んだ。

私は、その日は朝五時からメシの時間以外はひたすらハンドルを握り、サハラのだ真ん中の街・タマンラセットを目指していた。止まる積もりは皆目なかった。が、鬼気迫るような叫び声に、気持ちより先に右足がブレーキペダルを踏み込んでいた。車がぎゅちり停止するのもまたずに、「ちよっと話してくる」といって、女は飛びだしていった。私も、重い身体を起こして、続いた。そこで出会った男、それが河野兵市だった。後に知ったが河野のキャッチフレーズは「焦げつく青春」だった。出会ったそのとき河野はまさに焦げ付いていた。砂漠の旅がもう一ヶ月になるといい、顔は



左が河野兵市、右が筆者

真っ黒。風呂もないので、まあ、レゲエに近い趣が漂っていた。河野もその日のキャンプ地を目指して先を急いでいたが、私達は「なにをしているの」「どこから来たの」などなど、彼にとってはドーデモいいような質問を立て続けにした。面白かったのは、「なに食べちゃんですか？」と順が聞いたら、「ジャガイモっ！」と河野が答えたことだった。しかも、水や燃料は貴重なので、生のまま囓っているというのだった。

☆

河野とは、これが縁で最後までつきあった。河野は自分のことを、「いやあ、ボクなんかたんなる旅人ですよお」といい、冒険家と呼ばれるの嫌がる風情があったが、植村直己を心の底から尊敬し愛していた。

河野は、一九九七年五月に「日本人初の北極点徒歩単独行」を成し遂げ、TVや新聞などで大々的に取り上げられ一躍有名になったので、覚えておられる方も多いと思う。しかし、残念なことに一昨年五月、北極点から六年かけて、日本の自宅まで徒歩で戻ってくるという新たなスタイルの冒険『リーチングホーム』の途上で無念の死を遂げた。

河野は愛媛のみかん農家の生まれで、みかん箱を担いでみかん山を上り下りし足腰を鍛えたと言っていた。それに嘘はなく、見るからに木訥で屈強な男だった。会えばいつも別れ際に、ほんならまたね、といってぎゅっと思いつき握手するのであった。こいつは誠に痛い握手だった。

リーチングホームの壮行会でもそうだった。その時は三歳になる息子もガッチリ握手をもらった。息子は今でもそのことを覚えている。砂漠の旅で、わたしは順にプロポーズし、その結果、今の私の家族がある。その砂漠で会った河野は、人生の節目に思いがけず現れる神様のようでもあった。実際、その後も会うたびに生きていく勇氣としなやかさのようなものをももらった。まだほとんど無名の頃の河野に会えたのは僥倖だった。

あんな純粹無垢な男はそういない。盛夏を迎えると、あの灼熱の甘い日々の思い出と希有な出会いがない交ぜになった遠き砂漠に思いを馳せる。サハラがわたしを誘うのである。

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがり、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

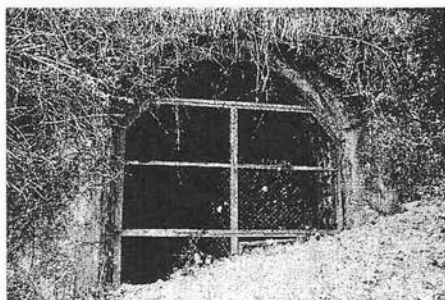
▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千元、半頁広告二万五千元、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願いいたします。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないというらやましがられるたびに、「丹波のきずな」の強さを思います。

(山ざる編集部)



鐘ヶ坂トンネル、レンガ積みで日本最古

柏原町

氷上郡と篠山市を結ぶ鐘ヶ坂峠に明治十六年（一八八三）に完成した鐘ヶ坂トンネルは、レンガ積みみのトンネルとしては日本で一番最初に造られたことがわかった。全国の歴代トンネルについて調べた社団法人土木学会の資料から明らかになったもの。この資料を

入手した県柏原土木事務所では「資料を見て驚いた。日本最古であることはまず間違いない」といい、「貴重な遺産。危険でなければ明治のトンネルを遊歩道として活用したい」と構想を練っている。

（平14・12・19日付）

高齢者の移動に住民が地域バスを運行

市島町

市島町鴨庄地区で、住民の手による地域バス「鴨庄ふれあいバス」の試験運行が始まった。交通弱者である高齢者の不便を解消しようと、一年前から検討を重ねてきたもの。全集落を巡回し、量販店や診療所がある地区の中心地に人を運ぶ。これまでタクシーや家族の車に頼らざるを得なかった高齢者からは、「外に出やすくなる」と喜ぶ声があがっている。（平15・6・22日付）

移住者向けに坪77円 で宅地貸します

青垣町

青垣町が同町文室にユニークな町営住宅を建設する。地元の定住対策としての「公営住宅」と、都会からの移住者を呼び寄せるため、町が土地のみを貸し、居住者自身が費用を負担して住宅を建てる「定期借地方式」を組み合わせたもの。借地期間は最長五十年とし、借地料は月額一万円程度で、一坪当たり約七十七円という格安価格。菜園ができる土地も付いている。新年度に公営住宅を整備する。

（平15・2・27日付）

柏原町内の商業地が 下落率で県下5位

地価調査

兵庫県県土整備部まちづくり局土地対策室は、二〇〇三年度の県内地価調査結果を発

表した。丹波地域では、柏原町柏原字古市場町西側が、商業地の下落率上位地点でマイナス一六・七％と県下五位の下落率。篠山市住吉台がマイナス一七・五％と、昨年に続いて住宅地で県下一の下落率となった。

柏原字古市場町西側の調査地点における地価は一平方あたり六万三千七百円。今回初めて商業地の下落率十位以内になったことについて、県土地対策室では「経営者の高齢化や店舗の老朽化に加え、幹線道路沿いの大型店舗に客が流出しており商店街としての価値が低下した」と分析している。

丹波では住宅地の平均価格が二万七千三百で、変動率はマイナス八・二％（前年六・七％）。柏原町大手町南側の住宅地は六万五千五百円であった。（平15・9・21日付）

蓄音機ミュージアム

小田 晋作（柏原町）

六月一日、JR柏原駅近くにある旧柏原町トレーニン
グセンター二階に、「丹波かいばら蓄音機館」がオーブ
ンしました。毎月第一日曜日のみ開くささやかなミュ
ージアムですが、内容は貴重な蓄音機、SPレコードを数
多く備えた世界的にも珍しいものと、関係者は自負して
います。郷友会員の皆様にも、帰省の折に一度足を運ん
でいただきたいと思います。

展示されている蓄音機は、宝塚市に住む品川征郎氏の
コレクション約五百台のうち約百台で、すず箔の管上に
音を記録する方式のエジソン第一号機（一八七七年製Ⅱ
レプリカ）から、木製のホーン（ラッパ）で音を共鳴す
る型、ラッパを内蔵した家具調のものまで、一九二〇年
代後半に「電気蓄音機」に変わるまでの蓄音機が、時代
を追ってわかるようになっていきます。

またSPレコードは交響曲、器楽曲からオペラ、シャ
ンソン、タンゴ、ジャズ、日本の歌謡曲など一九〇〇年

代前半の曲が網羅され、未整理のものが多いながら、二
十万枚が保管されています。

品川さんは老舗の食品機械会社役員のかたわら、四十
年近くにわたって、これらの蓄音機、レコードの収集を
続けてきました。和歌山県古座川町の山中の小学校廃校
舎を借りて収蔵していましたが、もう少し自宅に近い場
所を探していたところ、知人の仲介で一昨年、柏原町所
有の倉庫に預かることが決まったものです。

柏原では、町活性化の仕掛けづくりに取り組んでいる
第三セクターの株式会社まちづくり柏原（岡林克昌社長）
が運営を引き受け、空家となったトレーニングセンター
でとりあえず仮オープンすることになりました。常動ス
タッフもいず、運営資金も皆無という状況の中での開館
ですが、運営しながら少しずつ体制を整えていこうとい
う考えです。

ぜんまい仕掛けの手動式蓄音機にSPレコードと言
うと、「シャーシャー」という雑音をイメージされる方が
多いかもしれませんが、それは全くの誤解。非常に澄み
切ったすばらしい音色です。

電気式録音の場合は、マイクによる再音、電気信号変
換、テープ記録、原盤作成、プレスといった複雑なプロ
セスを幾重にも経て音が再生されますが、原初のレコー

丹波通信



オープンした「丹波かいばら蓄音機館」
(旧柏原町トレーニングセンター2階)

きりせず、エジソンが電球の実用化に熱中している間に、他の何人かがレコードの開発に取り組み、エジソンも対抗してレコード製作に乗り出しますが、最終的にはベルリナーという人が「グラモフォン」と命名して大量生産に成功。そ

ドはホーンに向かって直接吹き込んでるので、生の演奏にはるかに近い音が出るわけです。

品川さんは「SPレコードの音は立ち上がりが良い。つまり、小さい音量でも遠くまで聞こえる」と表現しています。同氏の解説によると、蓄音機を発明したのはエジソンで、一八七七年（明治十年）のことですが、最初は前述の通り、筒（シリリンダー）にすず箔を巻いて、それに針で溝を付ける方式。蓄音機というよりは、声を録音する目的のものでした。しかしもうひとつ用途がはっ

の部下で有能なプロデューサーだったガイスベルクが、ヨーロッパの有名アーティストを取り込んで、多くの名曲を再生します。そして、ベルリナーを引き継いだジョンソンが一九〇一年、ビクターの設立にこぎつけます。こうして本格的な音楽再生装置としての蓄音機、レコードが確立していきます。この時代、蓄音機は高級な文化的家具として、ステイタスの象徴のように見なされ、日本でも大正末期から昭和初期に輸入されたものは約千円、一家一軒に相当する値段だったそうです。

一九二〇年代、ラジオの出現とともに、蓄音機も電気録音式の「電蓄」に変わり、やがてLPやEPに。そして現在のCD時代になると、若い人はレコードすら知らなくなっています。それだけに、この品川コレクションをより多くの人たちに知ってもらい、現在をものしるのすばらしさに触れていただきたいと思います。

六月の開館日は、マスコミに広く報道されたこともあって京阪神などからも多くの来館者でにぎわいました。まだ仮オープンの方ではありますが、これだけの貴重な文化観光資源をうまく活用し、いずれは行政当局の支援を得て、しかるべき展示場所と運営体制をとってほしいものです。

（丹波新聞社社長）

◆青木かよ子さん

先月故郷に帰りました。山はつつじ、こぶしが、芽吹きはじめた木々の間に点々と彩りを添えていました。さてもふるさとは美しきかな！

(平15・5・13)

◆足立邦子さん

相変わらず毎日忙しく過ごしておりますが、まだまだ青春。元氣でがんばりたいと思っています。

(平15・5・14)

◆足立かをるさん

毎日おかげさまで健康やかに楽しく充実した日々を過ごしています。皆様もどうぞお身体お大切に祈ります。

(平14・10・10)

◆足立敦子さん

十月十六日に母が亡くなりました。当地で預かりまして二年七ヶ月いっしょに過ごしました。苦しまずに亡くなり

ましたことが救いです。何だかポッカリと心に穴があいたようです。九十二歳でした。年には不足はありませんが、

(平14・11・5)

◆葦田冬子さん

秋深くなってまいりました。昨日はなつかしい本とお便りをいただきました。これからは、この本を楽しみにしています。

(平14・10・24)

◆足立松子さん

『山ざる』33号に掲載して頂きましてありがとうございます。何度も大きな声で母に読み聞かせている父のうれしそうな姿に感謝でございます。ほんとにありがとうございます。

◆足立徳子さん

内村鑑三の系統のグループで戦前の教育を受けたものは、日本の大切なものを伝えるべし……とリーダーの夫人

が叫ばれ、若い人について神武天皇の足跡(熊野・日向)、また天孫降臨の地に出かけました。芦田均氏の姪御さんも同じグループで行動しました。主人・芦田昌彦(昭和十一年柏中卒)川崎製鉄勤務四十五年、退職。現在八十四歳、ちよつと元氣がなくなり、外出は不可能です。

(平15・4・29)

◆足立誠一さん

お祝いをしてほしいわけではないが、私は大正二年生まれです。八十歳はとくに過ぎましたが、お祝いがあると今年の『山ざる』誌で知りました。私はお祝いをしてもらっていませんが、青垣町出身はだめなのですか。

(平14・10・21)

◆折り返し会長よりお便りを差し上げました。毎年の関東水上郷友会「ふる里の会」の席上にて、満八十歳になられた郷友のうち、会にご出席いただいた方へ、会長からお祝いの言葉と、花束をお贈りしています。会員名簿に記

載されている生年によって、祝寿のご招待状を差し上げておりますが、手違いがございましたら、忌憚なくお申し出のほどお願い致します。ちなみに、平成十五年度は大正十二年生まれの方々にお届けいたします。(事務局)

◆天野清子さん

いつもありがとうございます。私もなかなか外出できず、楽しく読ませて頂き、なつかしさを味わい元気づけられています。(平14・10・25)

◆池上忠志さん

三年前に発病しました心筋梗塞が完治せず、禁酒禁煙の生活で、酒の席は遠慮することになっています。些少ですが会費分七千円寄付させていただきます。よろしく。(平14・10・2)

◆生田正輝さん

八十歳を迎えましたが、なんとか元気で消光しています。(平15・4・28)

◆安達葉子さん

さわやかな季節になってまいりました。このたびもご案内状や『山ざる』誌をお贈りくださり、ありがとうございます。今年も欠席いたします。次には皆様とお会いできることを楽しみに。皆様のご健康をお祈り申し上げます。(平14・11・9)

◆石井弘さん

新潟での単身赴任から、前橋に戻って来ております。いつかは懇親会に出席したいと思っています。(平15・4・25)

◆井田悦子さん

いつもお世話さまです。皆様にお目にかかるのを楽しみにしています。(平14・10・25)

◆伊藤富士子さん

さわやかな秋の到来でほつとしていきます『山ざる』誌33号ありがとうございます

いました。なつかしく拝読させていただきました。晴天の秋、そば降る雨にぬれた秋と、丹波の山も美しいことでしょ。年とともにいくらかからだの不調はあるものの、がんばっております。郷友会の皆様のご健康をお祈り申し上げます。(平14・10・29)

◆井上陽一さん

『山ざる』誌に母(井上ひで)の生家の写真が掲載されましたが、私も小学生、中学生の折には、時々この家に連れていかれました。ドジョウやマツタケ採りに興じていたことを思い出します。ありがとうございます。(平14・10・24)

◆大江範子さん

毎年十月〜十一月の土・日は全部予定があり、いつも欠席で申し訳ありません。(原稿もすみませんでした。)とりあえず年会費二千円のみ送らせて頂きます。(平14・10・28)

◆今津幸子さん

山口と埼玉を行ったり来たりの日を送っております。(主人、山口に単身生活?) (平14・11・6)

◆井本義一さん

じわーっとこみ上げて来る懐かしさが一杯の『山ざる』33号ありがとう。まさに感激あれ人生です。(平14・10・23)

上野(重喜)さんの声をNHKラジオ深夜便「心の時代」で親しく聞かせていただいております。今年は節目の年で、なにかとありまして、残念ながら欠席します。(平15・4・30)

◆岩槻邦男さん

大学院入試業務で拘束されています。ご盛会を祈ります。(平14・10・22)

◆上 高子さん

十月十三日から二十日まで中国へ出張しています。北京の二大で日本語

を学ぶ学生達に現代日本と異文化共生について講義するためです。(平14・10・25)

◆上嶋恵二郎さん

先般は五十年ぶりに小学校の同窓会に出席し、なつかしい一日を過ごしました。(平14・11・6)

◆植田憲雄さん

『山ざる』33号ご惠贈ありがとうございます。渡邊会長の巻頭ごあいさつや、編集後記の鶴田さんのいわれている丹波一番の快適な(私の大好きな)秋です。忙しいことになりそうですが、ぜひ出席をさせて頂きます。(平14・10・30)

◆打田輝一さん

ほとんど氷上町のほうにおり、横浜は時たま来るだけです。出来れば、以後連絡は氷上の方にお願致します。(平15・4・30)

◆内田康代さん

近況エッセイ、旅のエッセイ、会員便りを大切に読ませて頂きました。中には知人を見つけて更にうれしく、エネルギーを与えられます。(平14・11・7)

◆遠藤妙子さん

『山ざる』誌をいつもお送りくださいましてありがとうございます。懐かしくふる里を思いながら、読ませていただきました。一度会に出てみたいと思っておりますが、孫の世話などで忙しくしておりますので申し訳ございません。(平14・11・30)

◆尾上典世さん

永い間ありがとうございます。『山ざる』で色々田舎の様子を見させて頂きました。昭和九年の昔の卒業で、学校も変わり、知る人もなし。次回からの『山ざる』不要です。今までありがとうございました。(平14・10・23)

◆大垣忠男さん

お世話役ご苦労様です。年会費二千円、指定用紙にて振り込みました。今後ともよろしくお願い致します。

(平14・10・28)

◆大河洋介さん

札幌に単身赴任しておりますが、平成十四年十月に茨城県に転勤となりました。現在協和発酵(株)土浦出張所に単身赴任しています。

(平15・5・9)

◆大塚秀次さん

毎回ご連絡頂き恐縮しています。十五年間氷上町にいただけで、身寄りもありませんので足が遠のいているのが実情です。今年は、墓参には帰郷しましたが……。

(平14・11・6)

◆大西恒夫さん

いつも勝手ばかりで、『山ざる』誌についてもいつも大変お世話になりつ

放しで申し訳ありません。体もおとろえる一方です。皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(平14・10・21)

◆大野善三さん

景品用に本を三冊同封します。医学ジャーナリスト協会長として、皆で翻訳したものです。皆様によろしく。

(平14・11・10)

◆岡原裕康さん

柏高の往時の新校舎天文台にて、徳田先輩から有り難きレクチャー。内容失せても、イメージ鮮明。『山ざる』誌にての健筆、じっくり読ませていただいております。

(平14・11・12)

◆小谷 崇さん

小田さんの「丹波通信」によると「氷上市」¹是²とのこと。みなさん賛成なのでしょう。もちろん地元のみなさんが賛成されるのなら、それでもいいと思います。

(平14・10・28)

◆桂 照子さん

今年もはや晩秋を迎え、木枯らし一番も間もないことと思われ。どうぞお元気で。

(平14・10・23)

桜も終わり、はや緑も色濃く清々しい季節になってまいりました。八十歳になりましたが、まずまずの健康で暮らしております。

(平15・4・28)

◆金川昌義さん

私事ながら、本年四月一日付で、北九州市に転勤となりました。今後ともよろしくお願い致します。

(平15・5・6)

◆国村きぬゑさん

傘寿記念のご招待を頂きまして誠にありがとうございます。残念ですが三ヶ月ほど前に旅行計画を致しましたのが重なりました。費用も払い込みましたので、申し訳ありませんが、御会には欠席とさせていただきます。

(平14・10・30)

◆岸部正巳さん

年に四〜五回田舎に帰っていますが、車で帰るには危なくなりJ.Rのジパングを利用しています。(平14・10・22)
平成十三年脳梗塞で倒れ、左手足が多少不自由になり、どこへ出かけるにもおっくうで不便です。1キロメートルぐらいは歩けるのですが、家にとじこもりがちです。(平15・4・25)

◆小田晋作さん

丹波新聞の最新号をお届けしますの
で、よろしくお願い致します。(平14・10・28)

◆木内実喜夫さん

思わぬ出来事で車椅子生活になって
五年、心機一転、今秋から三度渋谷区
での日々を送っています。ご盛会を祈っ
ています。(平14・11・3)

◆小山敦代さん

常岡画伯の見事なスイス・レングフ

ルーの「絶寥」を表紙とする素晴らし
い『山ざる』をお送り頂きありがとうございます
ございました。故郷を同じくするだけ
で、どなたにも親しみを感じます。去
る六月十六日はじめて柏陵同窓会東京
支部総会に出席させて頂き、なつかし
い方達との出会いに励まされました。
今後ともどうぞよろしく、お願い申し
上げます。(平15・11・3)

◆小山とし子さん

ふるさととは遠きにおいて思ふもの
四季折々の丹波の風景を想いえが
いています。少々身体的にもひずみがあ
りますが、自分に勝つことの大切さ、
趣味、ボランティアなどに挑戦してい
ます。(平14・11・4)

◆久米 裕さん

家内が目下入院中のため、残念なが
ら欠席させて頂きます。郷友会の発展
を錦秋の秩父より祈っています。

(平14・10・23)

◆岸本昌子さん

一年が早く感じられます。皆様とお
会いできるのを楽しみにしています。
(平14・10・29)

◆木下清史・恵子さん

『山ざる』誌楽しみにしております。
同年代の人たち(昭和二十六年・二十
八年生まれ)の記事がないのが残念で
す。(平14・10・28)

◆児玉安正さん

『山ざる』を送って頂きありがとうございます。
ページをくるのも楽しみです。
(平14・10・25)

◆酒井重男さん

一昨年二ヶ月間キューバへ環境の技
術指導に出張しました。そのほか、日
本技術士会、中小企業のコンサルタン
ト、創業支援センターのコンサルタン
トなど忙しい日々を過ごしています。

(平15・4・26)

◆坂上五朗さん

家路暮れ稲架けし日の月明かり
昔の人はよく働きましたね。幼少のころ、月が出るまで稲を刈ったり、イナキに架けたりしていた母や兄達の姿を今も思い出します。

(平 14・10・22)

◆坂上 登さん

今年三月で秋田高専を定年退職いたしました。四月より東北大学金属材料研究所で、結晶工学関係のお手伝いをしています。

(平 14・11・7)

◆笹倉良正さん

一昨年秋、脊柱間狭窄症の手術を受け、未だ継続した歩行、特に駅の階段が困難で、今年も欠席させていただきました。

(平 14・11・7)

◆塩見みつゑさん

日ごろは色々とお世話になり、感謝申し上げます。寒さに向かう折から、

ご自愛のほどお祈り致しております。

(平 14・11・1)

◆志村勝郎さん

芦田均先輩が、柏中に入る前の二年間、崇広で学んでおり、私の父も彼を教えたそうです。

(平 15・4・28)

◆荘 正衛さん

(旧制柏中) 大正十二年卒の二十二回メイト五十名のうち、現存は高桑良弥君(東京在住)と小生の二名のみ。小生本年白寿を迎えたり。歩行不如意なるもなんとか生きています。いつまでも懐かしいのは、母校アルママターですね。

(平 15・4・25)

◆祐安夏恵さん

いつもご案内ありがとうございます。知人が少なく、失礼しています。出身地(グループ)をご紹介ければありがたいと思います。年齢が一歳違うとわかりません。会のととき、出身地別に

前に出て名刺交換したいですね。

(平 14・10・28)

◆大禄和代さん

お便りを頂くたびに、一年が過ぎるのは早いものだなと感じます。

(平 14・10・25)

◆高田美佐子さん

あいにく定例俳句会の日程と重なってしまいました。おなつかしい方々のお顔を思い浮かべながら、残念に思っています。

(平 14・11・13)

◆高見修次郎さん

本年定年退職をしました。会員名簿の勤務先の削除をお願い致します。

(平 14・11・5)

◆中川則文さん

一昨年より歩行が困難になり、出席できませんので悪しからず。

(平 14・10・25)

◆竹内博子さん

近いうちに転居の予定で雑用に追われています。NHKこころの時代のテレビ番組を忘れず長い間見えています。

(平15・5・14)

◆田中一美さん

八王子に移り住んで一年が経ちました。マンション暮らしにもだいぶ馴染んでまいりましたが身のまわりの雑事に追われております。

(平15・5・3)

◆田中憲雄さん

足首骨折で入院手術致し、目下リハビリ中です。

(平14・4・28)

◆谷 敬三さん

今秋、初めて柏高の同学年の在関東のメンバーで集まりました。男女合わせて十三名です。これからの氷上郷友会や柏陵同窓会の戦力になり得ると思います。五十歳を超えましたので、皆

仲良くやりたいと考えています。

(平14・11・8)

◆谷垣美代さん

また今年も『山ざる』にお目にかかることができました。来年も健康でお目にかかることを楽しみにしています。

(平14・11・1)

◆富田貞子さん

いつも懐かしく思いながら『山ざる』を拝見しています。同郷の皆様のご健康とご多幸をお祈りしています。

(平14・11・4)

◆永井壮一郎さん

長男(四十二歳で永眠)の喪に服しております。

(平14・10・26)

◆灰野悦昭さん

元気でやっております。皆様のご健勝を願っております。

(平14・10・22)

◆野口勝三さん

平成十三年一月に退職(そごう)してから体調不良のため療養中です。年金生活に入っております。

(平15・4・26)

◆能勢初代さん

おかげさまで元気に過ごしております。会費をお送りしました。お受け取りください。

(平14・10・21)

◆野村節三さん

所用のため今回は欠席します。『山ざる』誌お送り頂きありがとうございます。年会費未納の場合はご一報ください。

(平14・11・4)

◆細川倫夫さん

『山ざる』33号送付頂き繰り返し全記事を読ませて頂きます。本年の郷友会当日は、社のOB会幹事で、温泉旅行と重なり欠席です。別便で「鳩サブレ」五個送ります。

(平14・10・23)

◆藤田 純さん

『山ざる』誌も年々楽しみが増し、拝見させて頂いております。私としては、若い世代もどんだん会員として増えることを望みますね。また、水上ゴルフ同好会へのご参加も大いに募ります。

(平14・10・26)

◆橋本俊宏・清美さん

三月末日に十二回生のみで目黒の雅叙園で同窓会をしました。残念ながら十四人の集まりでしたが、楽しいひとときでした。またやろうと話し、いろいろな人生を語り合いました。

(平15・5・8)

◆藤原知徳さん

京都駅から山陰線または大阪駅から福知山線に乗り換えて、汽車から眺める山並みと谷川の流れば、また格別なものがあり、郷愁をさそったものです。近頃は丹波へ帰る回数も少なくなつて……。郷友会には是非出席したいが、

今回は先約があり残念です。

(平14・10・22)

◆葉山 勝・たづ子さん

皆様の御活躍嬉しく思っております。私どもは何かと忙しく、行事等と重なり参加できませんので、退会させていただきます。

(平14・10・28)

◆広沢克江さん

ご案内ありがとうございます出席できませんが、ご盛会をお祈り致しております。

(平14・10・25)

◆広瀬靖典さん

公園管理の業務にもすこしづつ慣れてきました。公園は休日のほうが休みが取れにくく、せつかくですが今年も欠席いたします。

(平14・10・29)

◆藤田タカ子さん

思い出や色々なつかしい出来事をお書きくださいましたご本をお送りくだ

さいましてありがとうございます。楽しんで読ませて頂きます。

(平14・10・22)

おかげさまで元気に過ごしております。八月には、九十歳になります。

(平15・4・27)

◆婦木一男さん

『山ざる』誌33号楽しく読ませて頂いております。丹波のことが、もっと知りたいですね。

(平14・11・4)

◆藤田千治さん

六月末、退職致しました。丹波に行く機会が多くなると思います。こんごとも、よろしくお願い致します。

(平14・10・22)

◆森田 宏さん

十一月十六・十七日はグラン多摩フェスタ2002が実施され、その実行委員になっております。年会費は別途送金します。

(平14・10・12)

◆堀井隆川さん

日曜日は法務多忙のこと故、会には出席できません。大変残念です。皆様方よろしくお伝えください。高尾（JR中央線終点）にお出かけの折は、一報ください。東京の西部、高尾山国定公園、多摩御陵、武蔵野陵等散策ご案内いたします。（平14・11・2）

いつものことながら、日曜日の（柏陵同窓会）総会開催でもありまして諸用のため出席できません。盛会裏に総会・セミナー・懇親会が開かれますことを祈念申し上げます。特に今回の講師（白井小五郎さん）のお話は期待しており、聴きたい気持ちで一杯です。また、その講演内容は『山ざる』に載せて頂きたい思います。（平15・5・14）

◆本城英明さん

「ふるさとの会」にはここ何年かは職員旅行と重なり、ご無沙汰してまいりました。今年は一週先がその旅行となりま

したので、久しぶりに出席予定でいます。（平14・10・23）

◆前園雅子さん

上は十三歳、下は二歳など三人の子供の子育て最中です。まだしばらくは、自分の時間は取れそうにありません。いつか、皆様にお目にかかれる日を楽しみにしています。（平15・4・25）

◆松本栄二さん

七十の齢を既に過ぎた私は、いま、『山ざる』を手にして丹波に思いをはせています。敗戦直後、暴れ狂った柏原中学に籍を置いた頃のこと、教師と生徒がぶつかり合ったさまざまな事件等々憶い出します。（平14・10・28）

◆横谷喜代孝さん

「ふるさとの会」のご招待ありがとうございます。出席できませんが、氷上郷友会の会員であることを嬉しく思っています。（平14・10・31）

◆山本明男さん

若輩者ながら、末席をけがさせて頂きます。今回は自分の意志で出席させて頂きます。また日ごろは数々のご支援ありがとうございます。（平14・10・24）

◆村上善英さん

去る十月二十一日、二十二日、関東在住の柏高七回生十七人と、仙台・松島遊覧の旅に参加して気力の回復のきっかけになりました。同郷の友は有り難いものです。数年ぶりの遠出でした。（平14・11・12）

◆山岸幸子さん

『山ざる』33号も楽しく、かつ懐かしく読ませて頂きました。特に「丹波を撮る」の中の丹波弁がおもしろかったです。また、「池上義一遺作集」のこうとりぼうという言葉は、小さい頃を思い出させてくれました。（平14・10・21）

◆山口敏之さん

兄も単身で横浜に来ておりましたが、(五年間)ようやく関西に帰れることになり、喜んでおります。

(平14・11・5)

四月二十九日に三十年ぶりの卒業同窓会があり、柏高に行ってきました。

(平15・5・12)

◆吉井和弘さん

今年は『山ざる』が発刊されないのかと思っておりましたが、本日受け取りました。毎年楽しみにしています。

(平14・10・21)

◆余田貞雄さん

貴会のご発展を祈ります。小生腎臓腫瘍の手術で近大付属病院に入院。手術日は、十一月十八日の予定です。

(平14・11・4)

◆依藤広次さん

昨年の祝寿会ありがとうございます

た。ご盛会お祈りいたします。

(平14・10・23)

◆若森敏郎さん

ご連絡頂きありがとうございます。十一月十七日はあいにく邦楽研究会に出席予定があり、残念ながら欠席します。最近は〇〇三発生抑制の関連で、風力発電計画で忙しく仕事をしております。

(平14・11・10)

◆計報

平成十五年八月三十一日までに事務局に届いたものです。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

足立 誠一殿	平成14年10月
井上 雅次殿	同 9月25日
石田 吉郎殿	同
植田 博殿	同 6月10日
荻野 一雄殿	同 4月11日
松下せつ子殿	同 11年11月
山本 湧一殿	平成13年12月20日

原稿大募集

本誌は会員皆様の寄稿によって作られております。どんな内容でも結構です。ふるってご寄稿ください。



- テーマ：①ふるさと随想
②近況エッセイ
③会員だより(短信)
④丹波を撮る(写真)など

締切日：原稿はいつでも受け付けております。次号の最終締切日は平成16年8月20日です。

原稿枚数：400字詰4～5枚程度

送付先：〒247-0005 横浜市栄区 桂町1-1-1-101

(株)ホンゴ出版内

『山ざる』編集部

TEL 045-895-2712

FAX 045-895-4338

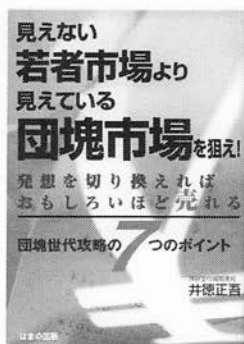
■ワープロで打たれた方は複写のフロッピーをお送りください。

■会員が書いた本

井徳正吾著

『見えない若者市場より
見えている団塊市場を狙え』

はまの出版 発行



作家・堺屋太一氏の著書「団塊の世代」（昭和51年、講談社刊）から流行語にもなったこの世代、戦後間もなくの昭和22年から24年までの3年間に生まれたベビーブーマーたちである。統計によると、この3年間の出生児数は806万人、少子化が問題になる最近3年間（平成11年～13年）の357万人に対して、1年

平均で150万人以上も多い出生児の世代である。

原因は言うまでもなく戦争。結婚適齢期の若者が戦役から解放されて（その多くは戦死したが）家庭に戻り、敗戦の虚しさや平和の癒しの中で子育てに励んだ結果である。

そのマグマのような大集団が成長するにつれ、さまざまな社会現象を引き起こしていく。時代はまさに昭和30年代後半から40年代へ、日本経済の高度成長期に生産・消費の両面で大きな影響力を持つようになる。

とりわけ、消費面ではこれまでの大人向けではない「ヤング市場」を創出し、独特のライフスタイルを形成する。「ジーンズ」も「ハンバーガー」も、雑誌「平凡パンチ」もこの世代の象徴である。

そして結婚と家庭生活での「ニューファミリー市場」となり、景気の消長と連動しながら、さまざまな消費市場を生み出していく。

その世代も今や55、56歳に達し、あと数年で定年を迎える。折から平成不況は長いトンネルに入ったままだ。企業倒産やリストラは日常茶飯のご時世にもっとも影響を受けている受難世代でもある。

ここまで本書の前半部分に依拠しながら、世代的な特徴を見てきた。しかし本書の目的は、世代論にあるのではない。著者自身、著名な広告代理店「博報堂」の市場開発局に身を置くマーケティングの専門家である。そこで『見えない若者市場より見えている団塊市場を狙え』という、そのものズバリの題名となり、本書のコンセプトとなる。

しかし、この世代が当面している生活の現状と将来不安は、かつてのような活力ある市場を生み出しそうにない。また生活資材もほぼ満たしており、モノに対する新たな欲望も薄れかけている。いきおいモノよりもココロの面の充足に価値を見出す

うとする。そうした世代のニーズに合った商品やサービスの創出を呼びかけるのが本書である。

著者は昭和27年氷上町生まれ。年代的には団塊世代を兄貴分として、全共闘運動の挫折などを下から眺めた冷めた世代でもある。(池田)

木村つた江著

『竹の花の咲くまで』

ホンゴー出版 発行



物事を見聞して文章化する場合、見聞したそのままを「随筆風」に書くか、イメージをふくらませて「小

説」仕立てにするか——本書の著者、木村つた江さんは、何げないことでも、そこに想像力を働かし、三人称にして会話を織りこみ、ストーリーのある小説に仕立てあげる。

こうして仕上げられた木村さんの著作は、これで三冊目である。一冊目は『青竹のように』(平成三年刊)。昭和六年に単身上京して結婚し、戦中戦後の苦難時代に紆余曲折を描きながら夫婦で立ち上げた会社事業をやり終え、ご主人を見送られるまでの自分史である。

二冊目は『竹の秋』(平成八年刊)につづく竹シリーズ三冊目が本書である。その立ち姿の颯爽として潔い風情から「竹が好き」と言われる木村さんが、本書の題名である『竹の花の咲くまで』には特別の思い入れがある。

『竹の花』はめったに見ることはない。折しも今年5月11日付け丹波新聞が写真入りで伝えるところによる

と、「竹の花」は六十年か百年に一度しか咲かず、咲けば地面に種を落として自らは枯れてしまうという。

その意味では「吉祥」というより「不吉」な花と言われるが、木村さんがあえてこの題名を選んだのは、自分の生命力に自信があるためであろう。生命力ばかりか創作力にも旺盛なものがあり、百年目に咲くと言われる「竹の花」を百歳バンザイで迎えるつもりであろう。

この夏に八十七歳を迎えられた今も、年二回発行の文芸同人誌『たきおん』に作品を発表し続けている。題材は日常生活や人間関係の一面であり、著者自身の体験的な題材であるが、著者の飽くなき好奇心とロマンへの追求心に支えられて作品を生み出している。

それは健康への精進と共に自らの感性を常に若々しく保っていくための日常不断の努力があつてこそと思われる。(池田)

■郷里について書いた本

春日町歴史民俗資料館著

春日町文化財審議委員会監修

『国史跡・黒井城址』

市島町公民館

ここで紹介するのは実は本ではない。全体でわずか六頁のパンフレットである。表紙を一見しただけでは、全国どこにでもあり、観光協会製作の客寄せパンフレットかと思ってしまう。ところが次頁へ読み進むと、それが大きな間違いであることが判る。まず山頂本城部の航空写真と、それに対応した縄張り図が現われ、それを説明する築城史的な解説が続く。赤井氏や波多野氏の興亡、それに明智光秀の丹波攻めの説明は未だ出てこないが、古城好きの人には表紙の黒井城址全貌・本丸石垣・下館跡の見事な写真に続く、この詳細なミクロ的解説が堪えられない。

そして赤井悪右衛門直正や戦国時代の丹波情勢が登場するのは終わりに近づいてからである。

すなわち本誌、いや本パンフレットは「黒井城」に焦点を合わせたもので、後に春日の局となるお福や直正から贈られた「豹の皮」を後世に伝えてくれた脇阪甚内は、あくまでも端役であり、最後に登場してくる「黒井城にまつわる人びと」の一人に過ぎない。主役は、あくまでも黒井城そのものである。

野村の丘陵から撮影したと思われる猪ノ口山系の雄大な写真と、そこへ矢印で示した的場砦や西の丸の地点指示は、あたかも自分が物見台に立って説明を受けているような感動を与えてくれる。数多くの古城愛好者が「丹波の城」と題する入門書や専門書を上梓しているが、これほど感動的な写真を添えた書物に出会ったことはない。

惜しむらくは、電子政府や電子日

本という意欲的な事業が進んでいるのに、この膨大な資料が、春日町役場や春日町観光協会のウェブサイトに記載されていないことになっている。三歳まで居たということになっているお福や、通りがかりで腹痛を起こしただけの大石おりくは丁寧に紹介されても、春日町を訪れる万人が見上げると、この雄大な国史跡の写真一つ出てこない。行政が建てまくった箱ものは漏れなく列挙されるのに、「中世の行政」が築いた箱もの跡は、古城愛好家のサイトでないとは触れられないのである。

(徳田)

本庄清子著

『丹波のひと筆』

高遠書房・刊

俳句の歴史や源氏物語を知る外国人でも万葉集を知る人は少ない。ようやく歴史が文字で記録され始めた

時代に、天皇や貴族だけでなく兵士や農民も長歌や短歌を創作していたと伝えると驚嘆する。貴族と庶民に貧富の差はあっても大きな教養の差はなかったのだから。

実は、今も日本の特殊性は変わっていない。高等小学校までしか教育を受けなかった人も立派な「自分史」を遺していく。米国や英国ではあまり見られない行為である。

郷里の氷上郡でも郷土の自然や歴史の愛好家や文章を書くのが好きな人が単独で、あるいは集まって研究やエッセイを刊行しているが、中には「広く知らせたい」と自然に思う作品もある。この『丹波のひとつ筆』もその一つで、「一時間に一台しか国道を自動車を通らない時代」に「鐘ヶ坂のすそ野」で育った著者が高校を終えてから都会へ就職して結婚し、「めったに意見の合わない」夫が柏原町下小倉へUターンしてから外での勤めや農作業、家事、子育て

てを立派に遂行しながら書き続けた随筆の集成である。

この随筆集の面白さは、『丹波のひとつ筆』という題名通り「土間のある家」「秋の情景」「母の残したつる柿」等の各章が巧みな筆捌きで読者を昭和三十年代の丹波へ連れ込むところにある。三十年代といっても水道工事や道路舗装が進みマイカーやテレビが普及する三十年代末期ではなく、二十年代や戦前と変わらぬ井戸水・土間・薪・ラジオ依存の三十年代中期以前の丹波だ。

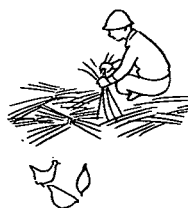
一方では「我田引水」のように最近の農家の姿も描かれている。こんな時代に何故水盗人をするの？と読者は思うが、「兼業農業ばかりとなり、一斉に農作業を行なう休日前は水の需要が急増する」という解説で納得する。

中谷宇吉郎にしろ田辺聖子にしろ名随筆家は、「家人」をチラリと登場させてもアレアレ描写したりはし

ない。公と私を明確に区分しているともいえる。ところが最近、巷に氾濫する「エッセイスト」の作品は旦那や子供にご高説を語らせ、孫の行動を描写して家族行状記の感がある。本書でも著者の敬愛する両親は絶えず登場するが、虫が飛びかっていた丹波への案内役であり嫌味がない。

同じ職場、同じ町の仲間だけに読ませるつもりなの「なあなあ」調の随筆も多いが、著者は全国の誰が読んでも当惑しないように地名や橋をキチンと説明している。随筆の出版で有名な高遠書房から上梓した著者だから当然かもしれないが……。

「一生に一度、本というものを出版したい」という夢を果たした著者の更なる活躍を祈りたい。(徳田)



展覧会

●玄2常岡幹彦日本画展

玄2常岡幹彦日本画展は平成14年11月28日から12月4日までの7日間、東京銀座「ギャラリーマキシム」で開催されました。会場には本誌「山ざる」33号の表紙を飾ったスイス・レンゲフルーでの「絶寥」のほかずらり大作がそろう、来場者を圧倒する雰囲気でした。常岡画伯は「自然の表面的な現象を

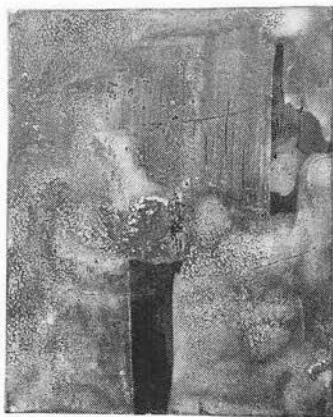


大作「月と舞う」を背に
梶原 清氏ご夫妻と

そぎとってダイレクトに伝えられる抽象絵画を目指してきた。これらの作品にはクラシック音楽、例えばスクリヤービンのピアノソナタとかドビュッシーの前奏曲といった音楽が画想を増幅してくれる」と語り、それぞれの作品に音楽のイメージを重ねていました。

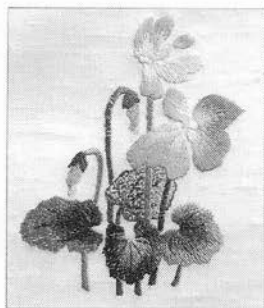
●荻野美穂子展

荻野美穂子展は、平成14年11月21日から27日まで7日間、東京銀座の「アトリエTK」で開催されました。茶陶の深さから発想した抽象絵画を中心に構成され来場者を魅了しました。



●第15回フランス刺繍作品展

篠原よね子さんが主宰される「篠原教室つづじ会」の第15回フランス刺繍作品展が平成15年3月19日から23日までの5日間、銀座かねまつホール5階で開催されました。オリジナル作品の即売も行われ、来場者で賑わいました。



同窓会

●平成15年度柏陵同窓会

東京支部総会開く

今年度は、5月25日(日)に九段会館で開催。例年は6月でしたが、阪神支部

との重複を避けて5月に変更させていただきますました。

本部から植田憲雄会長、母校から新任の井口剛校長のご臨席を仰ぎました。出席者は80名。今年の運営当番は9回生・10回生のみなさんでした。徳田八郎衛、林孝男さんらの熱心な呼びかけで、9回生だけでも阪神支部からの特別参加もあり19名の多数に達し、女性軍の内外助の功も大きくチームワークの良さをみせていただきました。

恒例の柏陵セミナーも、防衛庁で要職を歴任された9回生の臼井小五郎氏を講師に迎え「憲法第九条芦田修正の功罪」についてお話しいただきました。芦田均氏は、柏中3回生、外交官から、戦後は首相にもなられた大先輩です。芦田氏の問題意識は、半世紀後の今、イラクなど日本の「海外派兵」問題にも深く関わるものです。臼井氏のお話は、他では聞けない貴重な内容でした。

懇親会では、ボランティアでサービ

スしてくださった橋本龍笑師匠の浪曲手品などで大いに盛り上がりました。今年の出席は、昭和20年卒柏中44回生から、昭和52年卒柏高29回生までの範囲の方々でした。

来年は、さらにご年配から若い世代に及ぶ、より多くのみなさんご参加をいただきたいと願っております。

●柏高8回生3年4組同級会 宝塚・ホテル「若水」で開く

今年の5月は同窓会が集中した。17日は佐治中（昭和27年卒）、25日は柏陵東京支部、29、30日の両日は柏高8回生3年4組。物好きだと言われたがすべてに参加した。

佐治中の同窓会は集まりやすい宝塚の名門ホテル「若水」だったので予想を超える約60人が集まった。中学の同窓会は保育園の時から一緒だった仲間が多いけれども、その中には、今の中学生が聞けば驚くようないじめをした

り、また、いじめられたりしたが、それがすっかり忘れられ楽しい会話ばかりだったのが救いだった。

25日の柏陵東京支部同窓会は、恒例の九段会館だったが、今年は柏高9回生が幹事役を務めてびっくりするような派手なパフォーマンスを行った結果かどうかはわからないが、例年より約20%多い参加者があったといっている。これがいつまでもいつまでも続くことを期待している。



29、30日は柏高8回生3年4組の同級会で55人中14人が集まり有馬温泉の老舗ホテル「兵衛向陽閣」で開いた。3年4組としては初めてだが、柏高8回生は何らかの形で約2年ごとに開いているので、いつも集まる仲間も多く、元気はつらつで年を感じないのが不思議だ。一次会、二次会と時間が経つのも忘れ、話に花を咲かせた。これは青春時代に、日本はまだ決して豊かであったとは言えないにもかかわらず、それを表情に出さずに、将来に望みをもって伸び伸びと生きたのが幸いしているのかもしれない。(足立静雄)

同好会

●氷上ゴルフ同好会

平成14年9月に88回目の記念大会を迎えた当会ですが、この1年に新たに7名の郷友の参加があり、ますます活況を呈しております。



グリーンフィ어의 安い平日をコンペ開催日としておりますが、毎回5組のエントリーがありました。ハンディ改正もあったため、毎回、白熱の優勝争いが演じられております。

とは言うものの、そこは同郷の好誼、丹波弁が飛び交うパーティィは他のコンペでは得られない楽しさがあります。この1年の優勝・準優勝は次のとおりです。

○89回(茨城ゴルフ倶楽部)

川端 明光 藤田 徹

○90回(平川カントリー倶楽部)

塚口 智 渡辺貴美子

○91回(東松山カントリー倶楽部)

松下 文雄 藤田 純

郷友の皆様とのお知り合いの方のご参加をお待ちしております。

なお、ホームページにて92回大会(多摩カントリークラブ)の様子をご覧になれます。

会 長・渡辺 隆男

世話役・岡 吉明

藤田 純

TEL 048-460-1601

http://www.pcc-taiyo.co.jp



井田悦子
喜田綾子
長尾貴美代

大石佐代子
小糸イキ
安原三智子

小田明子
笹倉郁子
塩見みつえ

可部美智子
篠原よね子
渡邊貴美子

岸本昌子
千葉淳子



株式会社 **三 葉 水 道**

代表取締役 **橋 爪 忠**

(氷上町黒田出身)

〒276-0034 千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電 話 0474-84-7121 FAX 0474-82-9626

エクステリア専門商社

株式会社 **トコナメエプコス**

会 長 松 下 文 雄 (柏原町)

代表取締役 広 瀬 寿 和 (山南町)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル

TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

調布市文化会館たづくり内
アカデミー愛とぴあ
文芸誌「たきおん」同人

木 村 つ た 江

〒182-0005 東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5

電話 03 - 3300 - 6895

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状	第2-319号
技術士（電気部門）登録証	第15810号
エネルギー管理士（電気）免状	第 2857号
エネルギー管理士（熱）免状	第 5191号

若 森 技 術 士 事 務 所

所 長 若 森 敏 郎

〒302-0023 茨城県取手市白山5-4-13

TEL・FAX 0297-72-0907

1924年創刊 週2回(日・木)発行
1ヵ月 1,220円(郵送料200円)

<http://www.tanba.jp>



丹波新聞社

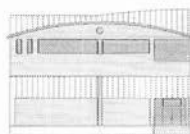
〒669-3309 兵庫県氷上郡柏原町柏原 201
Tel 0795(72)0530 Fax 0795(72)1956

代表取締役社長 小田 晋作



関東とふるさとをつなぐ「グローバル」な紙面

東・名・阪で事業展開中
大阪にATMテクニカルセンター
平成14年11月1日竣工落成



三協運輸株式会社

取締役社長 岸 本 勲

(氷上町出身)

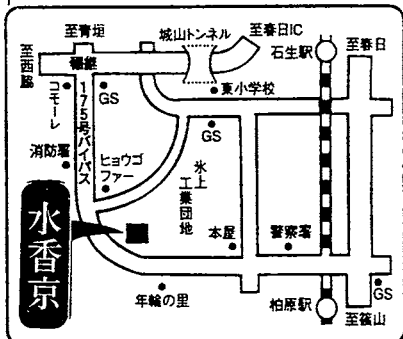
本 社 〒121-0064 東京都足立区保木間1-1-3
TEL 03 (3860) 8112 FAX 03 (3860) 1631
大 阪 支 店 〒578-0911 大阪府大東市新田中町3-3
TEL 072 (806) 6821 FAX 072 (806) 2831
名古屋事業所 〒457-0837 愛知県名古屋市南区加福町3-5
TEL 052 (691) 8574 FAX 052 (612) 2032
埼 玉 支 店 〒363-0008 埼玉県桶川市大字加納字379-1
TEL 048 (728) 9380 FAX 048 (728) 9381
倉 庫 東京・大阪・名古屋・埼玉・兵庫・北海道

◆本誌発行にご協力有難うございました

日本の真ん中から出た
柏原天然温泉

すい か きょう
水香京

TEL 0795-73-1126



舞鶴自動車道春日ICより城山トンネルを経て信号(福儀)左折、約1km

アカスリ・マッサージも始めました

入浴料：大人550円（中学生以上）

子供250円（小学生）

幼児100円

営業時間：朝9時～深夜1時

深夜3時（土）

定休日：毎月第3木曜日

ビル・マンションの総合管理

株式会社 **長友**

ちょう

ゆう

取締役社長 谷口 浩章

（氷上町出身）

本社 〒101-0041 東京都千代田区神田須田町2-6
TEL 03 (3257) 9611 FAX 03 (3257) 9619
E-mail h. taniguchi@mx4.ttcn.ne.jp

大阪支店 〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-5-7
TEL 06 (6222) 5076 FAX 06 (6222) 5025

人と技術で社会に貢献する

株式会社 ユー・ティー・ケー

代表取締役 水船 隆昌
社 長

〒 68

本 社：〒102-0083 東京都千代田区麹町5丁目3番地 麹町秋山ビル
Tel 03 (3556) 8484 Fax 03 (3556) 9577

東海営業所：〒319-1111 茨城県那珂郡東海村舟石川764-10 東成ビル3F
Tel 029 (283) 0460 Fax 029 (283) 0469

業 務 内 容：
・原子力関連事業
・訪問介護サービス事業
(ハートステーション)
・人材派遣事業
・広告企画事業

パークイン
Parkinn
KAIBARA

(株)柏原ビジネスホテル

TEL. 0795-72-3525

FAX. 0795-72-3495

〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・同窓会・ご商談・ご宿泊に

- ・会議室、宴会場完備
- ・駐車場 (50台、大型バス駐車可)

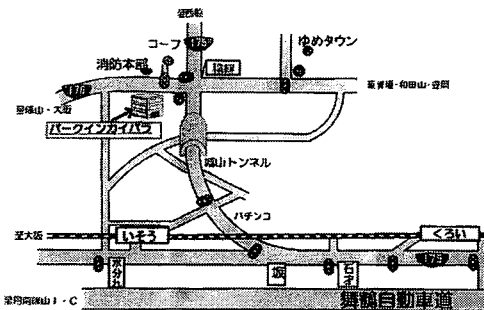
JR福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は

蔵出し料理

あじくら

TEL. 0795-72-3715



府中市教育委員会認定市民スポーツ指導員
東京都渋谷区日中友好協会理事
EMネット埼京理事

足立和巳

〒183-0051 東京都府中市柴町一-151-27
TEL・FAX ○四二-364-7227

足立かをる

足立勲平

〒251-0031 藤沢市鶴沼藤ヶ谷一-71-4
電話 ○四六六-2216 四六一

株式会社 ナレッジリンク
足立国際会計事務所

代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足立知佳子

〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一-1314 藤ヶワビル六〇二
TEL ○三-371-8180 四七 FAX ○三-371-8181 四七
E-mail: cadachi@ais.gr.jp

足立静雄

株式会社 トレンタ

足立真一

〒211-0005 川崎市中原区新丸子町七〇一
電話 ○四四-7221 六三七一
自宅電話 ○四四-八五四-六三四〇

日本損害保険協会特級（一般）資格 第特一三五八六号
飯田 保険事務所

飯田 光 雄

〒285-0045

千葉県佐倉市白銀四-14-15
電話 ○四三-四八五-〇五〇三
FAX ○四三-四八五-〇二九一

明治四年創業・伝統銘茶
株式会社 明日香園

代表取締役
池 畑 廣士郎

本社 東京都豊島区南池袋二-26-15
電話 ○三-三九八-〇一四七三二
直販店 西武百貨店池袋本店B1
電話 ○三-五九五-二一五〇七六（直通）

生田 清 弘

東京都世田谷区成城一-17-17
電話 ○三-三四一-五一一八九三

井 本 義 一

柏陵同窓会 東京支部
NHKラジオ深夜便
「こころの時代」(午前四時台)

上 野 重 喜

有限会社 PCC大洋

岡 吉 明

〒351-0014

朝霞市膝折町三-17-15
TEL ○四八-四六〇-12601
FAX ○四八-四六〇-1397
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

梶
原

やす
子 清

小
田 富
士 夫

萩
野 武

久
保 春
雄

〒 300 - 0031
土浦市東崎町十三二一六〇四
電話 〇二九八 - 二二九七八

木
呂 子 惠
美 子

〒 204 - 0012
東京都清瀬市中清戸二一七五〇一八
電話 〇四二四 - 九一三〇三三

株式会社 アイ・ケイ・アイ
代表取締役 岸 田 勇

〒 103 - 0013
東京都中央区日本橋人形町三二七一一〇
電話 〇三 - 三二四九 - 五二六一

坂
上
勝
朗

坂
上
明

栗
田
功

高
見
嘉
都
司

〒173-0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話 〇三-三九五六一〇六〇〇

合唱指揮者

笹
倉
強

〒352-0014
新座市栄四-五-二五
TEL・FAX 〇四八-四七七-五六四〇

坂
上
豊

セントラル・インボックス(株) 代表取締役

高見秀史

(株)フジサンケイリビングサービス 常任監査役
会社TEL 〇三―五三三三―一〇〇一
自宅TEL 〇四七―四三九―一六九一

千種倫幸

(株)サイモン・デジタル・センター

専務取締役
塚口智

東京都江戸川区東葛西六―一―一十七
電話 〇三―五六五九―三〇八一

常岡幹彦

鶴田宏

日本舞踊

西崎祥

端唄
根岸妙

〒224―0027 横浜市都筑区大圃町五〇〇―八
電話 〇四五―五九一―六六五五

青葉山 眞照寺
八王子 青葉霊苑
(都営八王子霊園隣り
第二期墓地分譲案内中)

住職 堀井隆川

〒193-0826

東京都八王子市元八王子町三-二三九七
電話 〇四二六-六三一八四〇三

村上末吉

村上久夫

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東三-四-十二
電話 〇三-三三三三-二一七-三三四

山口和久

恵理子
藤吉郎秀吉
賢一・寧々・愛々・茶々

〒196-0031

東京都昭島市福島町二-一〇-二七
電話 〇四二-五五四-八八六一

PHP文化フォーラム 殖生の宿
代表 吉住自由造

〒216-0033

川崎市宮前区宮崎五-五-三五
電話 〇四四-八六六-三六二一

渡邊隆男

◆本誌発行にご協力有難うございました



60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌 [さすが&されど] 好評発売中

本誌は読者投稿を主体に編集するユニークな雑誌です
／日々の暮らしから直直しまで知恵と体験を交流し合
います／年間購読料 3,500円 (税・送料込み) 下記へ。

時代と共にあなたの歴史

自分史年表

一家に一冊／書く・読む・調べる記入式
歴史年表／定価1,800円 (税・送料込み)

これから書きつぐ生活ノート

メモリー50

1年2ページ、50年間書ける気軽な
メモ帳／定価1,800円 (税・送料込み)

記念の年に贈る同時代シリーズ▶ [昭和8年生まれ] (昭和16年生まれは)
既刊▶ [昭和4・5・6・7年/昭和11・12・13・14・15・17年] ■各巻3500円
売切れました。

株式会社 **ホンゴ** 出版

代表取締役 池田 忍

横浜市栄区桂町 1-1-1-101

〒247-0005 ☎045 (895) 2712

<http://www2.ocn.ne.jp/~hongo/>

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみと呼びおこします。そんな仲間のひろがりをも、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東水上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、『丹波のさずな』の強さを思います。

(山ざる編集部)

集	編
記	後

★山が好きなこともあって昔から郡境の峠へ度々自転車に登って来ました。だが最近はず向うの村落も「越境」して訪れます。高校への二〇キロ通学は大名草も遠阪も大変ですが生野町黒川とは比較になりません。ほとんど人家がないのですから。(徳田)

★高校野球の地区予選が始まると、兵庫県の試合結果が気になり、新聞を開いていました。最近はず子供が通う高校の試合結果が気になり、埼玉県の欄を最初に見るようになってしまったのです。心は変われども、丹波で身に付いた野球好きだけは変わらないようです。(本城)

★九月も中旬というのに、柏原駅近くの国道のケヤキ並木でクマゼミ(ハチ子供の頃「カタビラ」と言っていたと思うが……)が勢いよく鳴くのを聞いて少々驚きました。例年なら盆過ぎには姿を消していまい筈なのに暦どおりでなかった今年の夏の象徴のように思いました。

しかし、日中どんなに暑くても日暮れは早くなっており、夜明けもゆっくり、朝もやがかり初秋の趣は充分でした。丹波の風土の中に身を置いて十日ばかりの生活で、東京では得られない心地よい「なごみ」を感じました。ふるさととはありがたきかな！(鶴田)

★姉妹旅行の帰り、柏原駅で常岡さんをお見かけし、思わず「常岡先生！」なんて声をかけてしまいました。失礼致しました。郷友会のお陰で御縁を得ましたが、各方面でご活躍の方々がボランティアで作っておられる『山ざる』の編集会議、皆様の温かい丹波弁が流れます。私には有難い実社会との「窓」です。(木呂子)

★本号目次裏に掲載しました「柏原おどり」は、野口雨情の作詞になるものです。が、柏原おどり保存会の谷口務会長によりますと、昭和十一年、雨情は約一週間、柏原に滞在し、小唄形式で一六首を作りました。昭和四十五年の大阪万博でこの小唄に古来からある「松づくし」の曲を

つけて披露し、八幡神社に掲額、盆踊りでも踊られるようになったそうです。

本号も徳田八郎衛氏の大活躍で丹波の写真(まよろ)を仰山掲載することができました。ついでながら徳田氏の「ストリップ：」の衝撃のエッセイ。たしかに昭和28年の和田中学校落成式の余興にも上演され、シヨックを受けました。今なら新聞ダネになるところですが……。(池田)

山ざる 第34号

平成十五年十二月一日発行

〈編集委員〉 足立静雄 池田 忍 木呂子恵美子
足立和巳 小田富士夫 片岡クミ子
坂上勝朗 常岡幹彦 鶴田ゆき子
〈編集〉 徳田八郎衛 本城英明 渡邊隆男

発行者 関東水上郷友会会長 渡邊 隆男

〒101-0051 東京都千代田区神田小川町一ノ二
DMSビル内・関東水上郷友会・事務局
☎03(3333)9311(2936) 2961

振替〇〇一〇一〇一三三三三三〇

製 株式会社二女社

編集協力 株式会社ホンゴ出版

おもわす 新し い

NEXT



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東京支店 111-0052 東京都台東区柳橋1-20-4久月ビル8F TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県東葛飾郡関宿町台町2192 TEL 0471-96-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321

故宮博物院名蹟の完全複製

当社は台北の故宮博物院と合作、中国歴代の名筆名画四百余点を厳選し、二十余年の歳月をかけ、先進技術の粋を駆使し、原蹟と寸分たがわぬ完全複製を完成、美術界の画期的大事業と世界の称賛を集めています。床の間に居間に、贈答に、悠久の芸術境をお楽しみください。詳細カタログ進呈。氷上郷友会々員には卸価格で提供。下記社長宛に一報下さい。

二宮社

社長 渡邊隆男

東京都千代田区神田
神保町2-2 / 〒101-8419

電話03-5210-4733

Fax. 03-5210-4723

<http://nigensha.co.jp>



P 29 | 3 梁楷 潑墨仙人図 (宋時代)

梁楷は南宋中期の宮廷画家。おなかを大きく突きだした仙人が、墨をたつぷりと含ませた筆で一気に呵成に描かれています。飄逸な味わいにあふれる、梁楷画の筆頭にも挙げられる傑作。草々の筆致になりながら、綿密で周到な構想と、揺るぎない錬磨の技術に支えられています。

紙本・墨画 桐箱入

画面寸法=48.0cm×27.5cm

軸装寸法=147.5cm×39.5cm

(頒価 税込 48,300円)

郷友会々員特別価格 33,000円